

出高
身麗

高
仙
芝
事
蹟
攷

諏

訪

義

讓

目次

序言	一七五
一、勃律の位地	一七八
二、勃律の向背	一八二
三、高仙芝の出自	一八四
四、高仙芝の勃律遠征	一八八
五、國際情勢の變化	一九五
六、羯師の叛謀	一九九
七、怛邏斯戰の展開	二〇三
八、怛邏斯敗戰の影響	二〇七
九、異族の榮進	二一一
十、安祿山の違反	二二四
十一、高仙芝の防衛	二二八
十二、高仙芝の終末	二三〇
十三、異族の活動	二三三
十四、唐代の半島人	二三九
結語	二四四

序 言

自分は嘗て西藏文の『于闐縣記』^① Li-yul Lung-bstan-Pa を讀んだ時、gDon-mar, So-byi, Drug-gu, Hor 又は An-se, Cu-lig, Bru-ca, Ka-ce 等と言ふ國名群に遭遇した。寺本婉雅師は是等を藉面國、莎車、突厥、畏兀兒及び安西、疏勒、波刺斯、屬賓など、翻譯された。が此の漢譯に相當するところの『釋迦牟尼如來像法滅盡之記』の中には赤面、蘇毗、突厥、廻鶻並びに安息、疎勒、勃律、加悉蜜など、譯出されてゐる。是れは既に羽田教授が指摘せられ又、自分が論じた如く、唐代の吐蕃 Tibet の沙門『法成』Chogrub が漢譯したのであるから、先づ絶對的な信頼價值があるであらう。この中、自分が最も興味を覺えたのは『勃律』^⑤であつた。

勃律は通常、印度北方の Balistan 地方であると考へられてゐる。が Bru-ca が勃律であるとすれば、單純に勃律を Balistan と見做す事は出来ない。と言ふのは西藏文獻には Bru-ca の外に是れと全く相並んで Bal-ti と稱する地名があつて、此の Bal-tiこそ Balistan を指すものだ^⑥と推定する、からである。然らば Bru-ca 即ちこの勃律は何處の地方を言ふのであらうか。

自分は是れを調査してゐる中に、唐代に於て高仙芝なるものが此の勃律を遠征した事實を知つた。その行程の大様は今も尙ほ記録として殘存してゐる。稀れに見る長途の大行軍であつて、西域の史地研究には見逃すべから

ざるものである。

而もその遠征の動機たるや、吐蕃の西北への進出にあつた。當時、東洋には西域を中心として三つの勢力が渦巻いてゐた。唐、吐蕃、大食の三國であつた。開元十五年(727 A. D.)十一月、求法を終つて安西(Kutcha)に歸り來つた新羅の僧、慧超は次の如く傳へてゐる。

又迦葉彌羅國東北。隔山十五日程。卽大勃律國楊同國娑播慈國。此三國並屬吐蕃所管(羽田ペリオ本 P. 4b, 1. 12-13)⁽¹¹⁾

又迦葉彌羅國西北。隔山七日程。在小勃律國。此屬漢國所管(同本 P. 5a, 1. 8-9)

又從大窳國巴東並是胡國。卽是安國曹國史國石驪國米國康國等。雖各有王並屬大窳所管(同本 P. 7b, 1. 7-8)⁽¹²⁾

蓋し三國の鼎立を最もよく物語るものであらう。

此の華々しき舞臺に颯爽として登場したのが高仙芝であつて、此の高仙芝はまた支那の中原人ならぬ異族の高麗出身者であつた。

高仙芝は西域に於て吐蕃大食と戦つた後、唐に歸つた。そして間もなく起つた安史の大亂に官軍の事實上の最高指揮官として働いた。不幸、終末は悲惨であつたが、若し許すに生命を以てしたならば、京師の要壁『潼關』は牢乎として抜くべからず、或は玄宗の入蜀も事なきを得たかも知れぬ。

茲に自分が是れを主題として採り來つたのは強ち勃律遠征の紀行の研究が終りを告げ、高仙芝の行實が完璧を

期し得たと言ふのではない。異族出身の一武將がかくも唐室の歴史に重要な役割を演じた事を明かにし、以て盛唐の世相を概観して文化の素質にも觸れてみたいと考へたからである。

- ① 大谷大學藏北京赤字版第五十四函。
- ② 于闐國史 p. 2, p. 9
- ③ 羽田ペリオ編『燉煌遺書』第一集影印本所收 1, 7, 36
- ④ 羽田教授同本解説。拙稿『漢譯于闐懸記攷』（支那佛教史學一の四）
- ⑤ 寺本師は『波刺斯 Bru-ya Parsa』と注せられた。
- ⑥ Yule; Cathay and the way thither, I, p. 71, N. 1. 近刊市村博士『東洋史統』卷二 p. 134
- ⑦ Ladwag Rgal-rabs-ni (A. H. Franke; Antiquities of Indian Tibet II) p. 38, 87. 原語の hBru-sal, sBal-ti 出づ。
- ⑧ Bru-ya は種々に綴られり。Bru-za, hBru-za, Gru-za, Gru-sa, Bru-sal, hBru-sal (B. Laufer: Die Bru-za Sprache und die historische Stellung des Padmasambhava, p. 1, T'young-pao 1908)
- ⑨ 兩唐書高仙芝傳。後節參照。
- ⑩ 高楠博士『慧超傳考』（大日本佛教全書遊方傳叢書第一所收）
- ⑪ 近刊、羽田教授『慧超往五天竺國傳彙錄』（京大紀元二千六百年記念史學論文集所收）あるも原影印本に従ふ。
- ⑫ 尙ほ行傳には大食が吐火羅 Tokhara 跋賀那 Fergana 骨咄 Kuntal 胡密 Kumidha 等と記してゐた事を示す。

一、勃律の位地

勃律の位地は西藏文献に依つては明確に爲し得ない。H. A. Jäschke 氏は『西藏の西、波斯に接する一國の名なり』^①と説明した。西藏語學の泰斗である Sarat Chandra Das 氏も僅かに『西藏の西北に位する一國』^②と爲したのに過ぎぬ。Laufer 氏^③及び Franke 氏が Gigit 地方と定めたのは全く Chavannes 氏の支那史料の解説を俟つての事であつた。實に勃律は支那文献によつて始めて確認せられて來た。

想ふに勃律が支那の記録に現はるゝのは北魏の時代であらう。洛陽伽藍記卷五には鉢盧勒と出で、魏書の西域傳には波路國と見ゆる。藤田博士は何れも Bator を寫したもので、今の Bator 地方に相違ないと言はれた。唐代に至ると鉢盧勒は玄奘によつて鉢露羅と稱せられ、波路は新舊兩唐書に勃律又は布露と記された。^④

勃律の國情に關して詳細なる記述のあるのは唐代からである。舊唐書西域傳はまだ簡單であるが、新唐書の西域傳になると勃律に大小の二國があつた事も傳へられて相當に精しい。大小二國の勃律の位置は新唐書の所傳に従つて究明すべきであらう。曰く

大勃律或曰布露。直吐蕃西。與小勃律接。西鄰北天竺烏婁……

小勃律去京師九千里而贏。東少南三千里距吐蕃贊普牙。東八百里屬烏婁。東南三百里大勃律。南五百里箇失密。

北五百里當護密之娑勒城。

と。この中、大勃律が吐蕃の西に連り更に西鄰に烏真 Udyana^④ 卽ち Swat Valley 流域を控へてゐたとすれば、大體に於て Balistan 地方^⑩と見做してよい。小勃律はそれに接して西北に位してゐたと言ふ。而も南五百里に箇失密 Kashmir^⑪ があり北五百里に護密 Wakhan の娑勒城 Sarhad^⑫ があつたと傳へるから、其の中間地區は正に Gilgit 地方であつたらう。此の時『東八百里屬烏真』と稱するのは『西八百里云々』の誤りである、と Chavannes 氏も指摘する^⑬ところと言ふまでもない。

是れを改めて言へば大勃律は Balistan であり小勃律は Gilgit 地方であつた。Lauter 氏は是れを進めて西藏文獻に出づる sBalti aBrusai をそれへ Balistan, Gilgit に比定して、aBrusai を Gilgit 地方なりと論述した。茲に Brusai は即ち小勃律であつて Gilgit 地方であると言ひ得るであらう。

更に新唐書西域傳は小勃律の王城を『王居孽多城臨娑夷水』と言ふ。娑夷水は高仙芝傳に『弱水也』と説明されてゐるが固より何等手懸りとはならない。が Gilgit 地方に河水を求むるとすれば Hunza 河 Yassin 河等上流の名稱は異るとしても Gilgit 河を外にしては得られぬから Gilgit 河と認むべきである。新唐書西域傳に俱位國 Yassin の治城は『勃律河』の北に位する由を述ぶるが、是れ又娑夷水を勃律河即ち Gilgit 河に見做すべき資料であらう。王城はその河上にあつた。従つて容易に Gilgit 城である事を推察し得るが、藤田博士の比定された如く Gilgit を『孽爾孽多』として『孽多城』をその下半の音譯^⑭と見れば先づ妥當な解釋が出来ると思ふ。

- ① A Tibetan-English Dictionary p. 381
- ② T-E Dictionary, p. 897.
- ③ Tauter : Die Brurza Sprache, s. 3. Franke : Antiquities of Indian Tibet, II, p. 88 N.
- ④ Documents sur les Tou-Kine (Turcs) occidentaux, p. 149-154.
- ⑤ 往五天竺國傳箋釋 p. 30b-31a
- ⑥ 大唐西域記卷三及び卷一一。
- ⑦ 舊唐書卷一九八西域傳、新唐書卷二二二下西域傳。以下、國名を以て傳とす。
- ⑧ 『有勒律在罽賓吐蕃之間』とのみ出て。
- ⑨ Swat valley より東北 Indus 上流地方まで含んでゐた。新唐書烏茶傳に『東北有達麗羅川即烏衰舊地』と言ふ。
- ⑩ Chavannes ; Turcs occid. p. 149.
- ⑪ 新唐書箇失窰傳に『北距勃律五百里』とあり。
- ⑫ 新唐書護蜜傳に『護蜜者或曰達摩悉鐵帝曰鐵出元魏所謂鉢和者』とあり。鉢和を Marquart 氏 (Ernscht, p. 223-224) が Wakhan に比定してより殆んど定説となる。娑勒域は新唐書卷四二下地理志に『烏飛州都督府以護蜜多國領鉢和訶城置』以護蜜多國領鉢和訶城置と見ゆる中にあり。後述する高仙芝の遠征紀行には『娑勒川』として出て。Ab-i-panja に臨める Sarhad なること Chavannes 氏 (Turcs occid. p. 154, N. d) の言ふが如し。Stein 氏が Serindia I. p. 86 N 12 に於て Sarugh Chupin (Tāñh-i-Rashīdī p. 354) に當じることは如何と思ふ。漢譯の娑勒色訶を是非考慮すべきであらう。
- ⑬ Chavannes : Turcs occid. p. 150, N. 1.
- ⑭ 同 p. 150, N. 2. 足立喜六氏は『東より八百里』と讀む事を提唱するにも肯首し難し(史學十八の一)『沙門法顯の葱嶺通

過の研究』p. 150, N. 2

⑮ Die Brucka Sprache, s. 3.

⑯ Meyendorff, Yule 等は『娑夷水』を Shyok River に比定して *qo* (Cathay and the way thither I, p. 71, N. 1). Shyok-R が Gligic-R なるか自分の地圖にて確めざるを遺憾とす。

⑰ 往五天竺國傳箋釋 p. 34 b

貞元年間、唐に歸り來りし求法僧、悟空はその『入竺記』に『摩和國』と記す。同じ語原を寫したるものか (Journ. As., 1893)。

因みに足立喜六氏は此の玉城を『大勃律』の三字を補ふべきものとし Parkata なりと推定された。音韻上の不都合はないが大勃律の玉城とは認め得ない。況んや小勃律を大勃律の東南と爲し、大勃律を Karat 地方、小勃律を Rhalai 地方に比せられたる(史學十八の一)は甚だ遺憾に思ふ。

二、勃律の向背

扱て大小二國の勃律の位地は明かとなつたが是れは如何なる關係に立つてゐるか。それは不幸にして正史類には見出し得ない。が慧超の往五天竺國傳の中に記載がある。

其大勃律元是小勃律王所住之處。爲吐蕃來逼走入小勃律國坐。首領百姓在彼大勃律不來(羽田ベリオ本 p. 52,

p. 11-12)

高麗出身高仙芝事蹟攷 (諏訪義讓)

即ち大勃律が元來の原住地で、吐蕃の爲めに逼られて小勃律の地に入つた事を知り得る。是れだけにても慧超の行傳は高く評價されねばならぬと思ふ。

此の事實を藤田博士は儀鳳三年(678 A. D.)である^①と想像された。が自分は舊唐書西域傳の(大)勃律の條に『開元二十二年爲吐蕃所破』と見ゆるのを茲に採らないとしても、儀鳳三年よりは餘程遅れるものではないかと思ふ、尠くとも長壽元年(692 A. D.)王孝傑によつて安西の四鎮が克復されてから以後に起つた事件^②の如く推察する。

何づれにするも小勃律の地に於て唐より最初の封冊を受けたのは沒謹忙であつた。彼れは開元の初め唐朝に侍して玄宗の寵愛を受け國に還るや綏遠軍を置かれて吐蕃の防禦に任じてゐた。が吐蕃は『我非謀爾國。假道攻四鎮爾』^③と稱して屢々逼り來り遂に其の九城を奪つた。茲に沒謹忙は使者を出して唐に來援を求めた。時に開元十年^④(722 A. D.)。

此の時の書面の言葉が新唐書の吐蕃傳の中に残つてゐる。曰く『勃律唐西門。失之則西方諸國皆墮吐蕃』と。前掲の吐蕃の進出理由と共に唐蕃兩國間に於ける勃律の國際的地位を看取し得よう。

唐としては勃律を失へば西方諸國が吐蕃の所管となり、西方諸國が彼れの掌中に入れば安西の四鎮はすでに危く、安西の四鎮は直ちに唐本國の安否に關係した。そこで唐は疏勒副使であつた張思禮に命じて步騎四千を以て晝夜兼行して救援に赴かしめた。そして九城を回復し沒謹忙を小勃律王に封じた。冊府元龜^⑤を探れば大首領の察

卓那斯磨浚勝を派して封冊を入謝したのを開元二十一年三月とする。が是れは恐らく開元十一年の誤りであらう。と言ふのは後述する浚謹忙の子『難泥』の封冊されたのが開元十九年四月であつたからである。浚謹忙の封冊は正に開元十年内の事であつたと信ずる。

浚謹忙の子難泥、難泥の兄麻來兮^⑦等しく唐の封冊を受けて親善關係を有してゐた。が其の次の蘇失利之が立つや吐蕃の誘ふところとなつて其の女を容れ唐との交渉を斷つた。是れが何時頃であつたか明確でない。舊唐書吐蕃傳の開元二十四年の條に『其年吐蕃西擊勃律。遣使來告急。上使報吐蕃令其罷兵。吐蕃不受詔。遂攻破勃律。』

上甚怒之』と出づるから開元二十四年(736 A. D.)の事かとも思はれる。が是れには開元二十九年二月麻來兮が位に即いて唐から封冊されと言ふ事實と矛盾を來たして認め難い。此の麻來兮が何時まで在位したか何等の記録も残つてゐない今日は、是を遽に決定する事は不可能である。若し推定を許さるゝならば天寶の初めとでも爲すべきであらう。

此の吐蕃との聯盟の結果に就いては新唐書の小勃律傳に『西北二十餘國皆臣吐蕃。貢獻不入。安西都護三討之無功』と述べてゐる。勿論この數字はその儘に信用出来ない。が西北の弱小國が吐蕃に靡いたであらう事は否めない。一國の向背と雖も交通の要衝^⑧に當つてゐた勃律の影響は實に甚大であつた。唐は是れに對して、一大決意を固めねばならなかつた。それは高仙芝の遠征であつたのである。

- ① 往五天竺國傳箋釋(233頁)足立氏は開元年間、張思禮が救援に赴いた事件なりとせらる。誤りなる事は後述するところ

によつて自ら知り得るであらう。

- ② 咸亨元年 (676 A. D.) 四月吐蕃は安西を陥れて長壽元年十月唐が是れを回復した。この間、大小勃律は共に蹂躪されてゐて特に小勃律のみ安全を保ち得たと考へられない。西藏文獻 (La-dwas Rgyal-rabs-ni p. 85) に依れば Guri-ston hdu-ye 王時代に sBa-lu-だけが征服されてゐる。Franke 氏はこの王を (679-705 A. D.) の在位とする。が自分は (679-703 A. D.) と認めた。言ひ換れば儀鳳四年の二月即位し長安三年の四月には確かに死んでゐた。而も泥婆羅を討征中に卒したもので大勃律の征服があつたとすれば聖曆元年 (638 A. D.) 前後であつたのであらう。

- ③ 新唐書小勃律傳

- ④ 新唐書吐蕃傳上 (p. 6a)

- ⑤ 冊府元龜卷九七一外臣部朝貢四。

- ⑥ 冊府元龜卷九六四外臣部封冊二。

- ⑦ 冊府元龜卷九六四外臣部封冊二。『二十九年二月小勃律王卒。冊立其兄麻覽來嗣位。冊曰云々』とあつて王名は多少異るも同一の人物なること明かである。

- ⑧ Stein: Innermost Asia, I, p. 36 白鳥博士『西域史研究』上の『罽賓國考』p. 391 足立喜六氏『沙門法顯の葱嶺通過の研究』(史學十八の二) p. 145 卷に述べられてゐる。後述する西陽雜俎の説話も小勃律國が交通の要衝に當つて天寶の初め頃、西方諸國の入貢するのを左右してゐた事を示すものであらう。

三、高仙芝の出自

高仙芝は兩唐書に列傳があつて資治通鑑に少しづつ散見する以外に殆んど事蹟が傳へられてゐない。是等の記するところに従へば高仙芝は本、高麗の人であつた。高姓は高麗の王姓でもあり早くより高姓を名乗るものが多かつた。高麗系統の高姓として名を擧げたのは北魏の高肇の一族であらう。③ が高仙芝は如何なる家系を有し如何にして唐に歸投したのであるか詳かでない。高麗は總章元年(668 A. D.)李勣によつて滅ぼされた。④ 記録に依れば唐は總章二年と儀鳳二年の二回に相當多數の高麗人を江淮山南及び河南隴右の諸地方に移したと言ふ。高仙芝は是等の中の遺民であつたと思ふ。後述する如く父が先づ河西軍に從つてゐた點よりすれば或ひは儀鳳二年(677 A. D.)隴右方面に送られた高麗の餘民でなからうか。

父を舍鶏と言つた。河西軍にあつて累進し四鎮將軍となつたと傳へる。四鎮將軍は古くよりあるが是れは安西四鎮の將軍と解した方がよい。高仙芝は父に隨つて安西に至つたと稱するから、後年安西に移つた事は間違ひなからう。

高仙芝は此の父を追ひ軍に身を投じたのであつた。故國を失ひ異郷に流離する身は所詮、是れより生きる途がなかつたのであらう。舊唐書には『仙芝美姿容。善射勇決驍果』と見ゆる。武人として立つのには好條件を具備してゐた。が又『初舍鶏以仙芝爲懦緩。恐其不能自存』とも言ふから、幼少の頃の性質を窺ひ得るものである。因みに母は何人であつたか記されてゐない。たゞ鄭德詮なる者の母を『乳母』として傳へ、彼れと肉親の如く交つたと言ふ。

高仙芝が安西に至つたのを『少』⁽⁷⁾にしてとも又二十餘とも傳ふ。何れにするも父の武功によつて游擊將軍を授けられ、間もなく父と同班となつた。初め節度使の田仁琬、蓋嘉運等に仕へたが重要視せられず、夫蒙靈弩に及んで遽かに信任せられ、開元の末頃には安西副都護、都知兵馬使となつた。

夫蒙は西羌の姓で後秦の建威將軍夫蒙羌より出でたと言ふ。⁽⁸⁾元和姓纂卷二には『今同蒲二州多此姓。或改姓爲馬氏』と見ゆる。李嗣業並びに段秀實の列傳には新舊兩唐書とも『馬靈弩』と稱するのは注意に價するであらう。高仙芝は殆んど此の夫蒙靈弩に依つて地位を獲て行つた。後述する如く高仙芝が勃律を平定して武威赫々として安西に還り來つた時、夫蒙靈弩が彼れの許可なくして捷書を朝廷に奉つたとて罵つた事がある。その有様を舊唐書の高仙芝傳に次の如く記してゐる。

仙芝軍還至河西。⁽⁹⁾夫蒙靈弩都不使人迎勞。罵仙芝曰。噉狗腸高麗奴噉狗腸高麗奴。于闐使誰與汝奏得。仙芝曰。中丞。焉耆鎮守使誰邊得。曰中丞。安西副都護使誰邊得。曰中丞。安西都知兵馬使誰邊得。曰中丞。靈弩曰此既皆我所奏。安得不待我處分懸奏捷書。據高麗奴此罪合當斬。但緣新立大功不欲處置。

是れに依つて安西副都護になるまでに于闐(Khotan)使、焉耆(Karasar)鎮守使等を歴任した事を知るべきである。又安西の南北兩道に鎮守した事も明かとなつた。必ずや安西の一般事情に通曉した事であらう。資治通鑑には更に四鎮副節度使を得てゐたとも言ふ。高麗の人が西羌種 Türgens に挽推されたと言ふ事は實に當時の東洋世界ならでは見られぬ光景であつた。⁽¹⁰⁾

高仙芝の僱従、封常清の傳を繕けば開元の末年に高仙芝は『達奚部』^①を征伐した。是れは玄宗より節度使の夫蒙靈駝に命ぜられたものであるが高仙芝をして討たしめたのであつた。他に記載なければ何年であつたか明瞭でない。が高仙芝は兵二千を以て綾嶺^②の下に至り、是れを破つた。恐らく是れが玄宗の聽聞に達したのであらう。田仁琬、蓋嘉運等が勃律を計りつゝも制し得なかつたのを高仙芝に討たしめる事とした。新唐書小勃律傳に『安西都護三討之無效。天寶六載詔副都護高仙芝伐之』と出づ。三度び實際上の討征を爲したとは考へられぬ。が天寶六載遂に詔勅は高仙芝に降つたのであつた。

① 舊唐書卷一〇四。新唐書卷一三五。通鑑唐紀三一。三二。三三。

② 冊府元龜卷九五六外臣部種族。高句麗の條に『王瑋曰高句麗。以高爲氏』とあり。

③ 魏書卷八三高肇傳。中に『五世祖顧晋永嘉中避亂入高麗……父鸞字法修。高祖初與弟乘信及其鄉人韓內冀富等入國』と言ふ。想ふに高麗人が家系を粉飾したものに過ぎない。高肇の妹は世宗宣武帝に入つて皇后となり一家榮ゆ。

④ 新唐書卷二二〇高麗傳。

⑤ 杜佑・通典卷二九職官一。

⑥ 封常清傳(舊唐書卷一〇四新唐書卷一三五)にあり。

⑦ 舊唐書。後説は新唐書。

⑧ 通志卷二九氏族略五。通鑑唐紀三一胡三省注。

⑨ 龜茲白馬河西。

⑩ 通鑑唐紀三三に依れば至德元載三月の條に、安祿山が平盧節度使の呂知誨をして安東副大都護であつた馬靈咨を殺さし

めたと云ふ。彼れが又高麗の地に來つて死するのも奇しき關係と言はねばならぬ。

- ⑪ 魏書卷一一三官氏志に『獻帝(弟爲達奚氏。後改爲奚氏)と見ゆ。通志卷二九氏族略五も同じ。但し關係を詳かにせず。後に觸れる如く唐代に達奚珣なる者がある。或は此の時に歸順したるものか。』

- ⑫ 新唐書龜茲傳に『凌山葱嶺北原也。水東流春夏山谷積雪』とありて Walter 氏が Badak Pass (On Yuan Chwang, I, p. 67) と爲すものか。

- ⑬ この三度とは田仁琬蓋嘉運夫蒙靈等の三人を意味するものであらう。史上この三人が勃律を征した事を發見せぬ。が唐、段成式の書き残した西陽雜俎卷一四に次の如き傳説がある。

天寶初安思順進五色玉帶。又於左藏庫中得五色玉杯。上恠近日西貢無五色玉。令貢安西諸蕃。蕃言比常進皆爲小勃律所劫不達。上怒欲征之。群臣多諛。獨李右座贊成上意。且言武臣王天運謀勇可將。乃命王天運將四萬人兼統蕃兵伐之。乃逼勃律城下。勃律君長恐懼請罪。悉出寶玉願歲貢獻。天運不許即屠城虜三千人及其珠璣而還。

此の王天運が何人であるか明かでない。或は蓋嘉運の事かとも考へるが勃律域を屠つた點よりすれば高仙芝の後述する遠征を物語つてゐると思ふ。勃律が交通の要衝に當つて諸國の入貢を妨げてゐた事、李林甫が遠征に賛成をした事、勃律城を全く屠つた事など興味深く看取し得る。

四、高仙芝の勃律遠征

是歲安西副都護高仙芝及小勃律國戰敗之

と見ゆる。^① 是れは高仙芝の勃律遠征を傳へるものに他ならない。時に高仙芝は步騎一萬を率ひ、行營節度使として安西即ち龜茲 Kucha より討伐に向つた。前述の如く此の遠征は非常なる長途の行軍で又難澁を極めたものであつた。^② 世界の戦史にも特筆せらるべき性質を有するであらう。

その行程は新舊兩唐書の高仙芝傳に出で、李嗣業傳及び通鑑等にも少しく見ゆる。就中、舊唐書の記載が最も精密であつて戦況のみならず通路をも明かに爲し得る。由來この葱嶺南進路は法顯法勇智猛等の佛教求法僧に依つて古くより用ひられたものであるが甚だ詳かでない。それ故、高仙芝の遠征行路は是等の地方の交通を明かにするの相當に役立つ。Chavannes 氏は夙に是れに着目し『西突厥史料』^③を編輯した中に、全文を佛譯して補註を施した。次いで Stein 氏も今を去る約四十年の夏 Kashmir より Gilgit に出で Hunza を通つた經驗^④によつて此の遠征路を研究して名著 Ancient Khokan の第一章を飾つた。是れは自ら又第二回第三回の實地踏査となつたものである。自分は是等を参照しつゝ行路の大様を辿つてみようと思ふ。

安西 Kucha を出で、撥換城 Yaka-aryk ^⑤を過ぎ、握瑟德 Mal-lashan を通つて疎勒 Kasigar ^⑥に入り、葱嶺守捉 Tash-kaurghan を經り播密川 Pamir-R ^⑦に至り、前後約百日を費して識匿國 Shighnan ^⑧に達した。新唐書に依れば此處に一時「頓」^⑨したと言ふ。軍旅を休養し且つ整備したのであらう。それより兵を分つて三道より進み、七月十三日を期して連雲堡に會する事とした。その一は北谷路で疎勒守捉使の趙崇玘^{玘(新傳)}が率ひ、その一は赤佛堂路で撥換守

捉使の賈崇璿が進み、その一は護密路で高仙芝自らが監軍、邊令誠と共に攻め入つた。Stein氏はこの三道を Wakhan Valley の Ab-i-panja 河を遡る主軍と反對に Taghdambash Pâmîr より來るものと Shighnam の Shakh dara Valley より直接に南下する北谷軍の三つと爲した。⁽¹⁴⁾

此の遠征の中に於て最も激戦のあつたのは連雲堡であつた。連雲堡は娑勒川 Ab-i-Panja に臨んでゐて、李嗣業傳には『娑勒城』と記されてゐるから Sahlad 城に相違ない。高仙芝傳並びに通鑑は『吐蕃連雲堡』と稱してゐる。吐蕃が此の地點まで進出して防備をしてゐたのであらう。處が實は堡中には兵千人ゐたのみで、城南十五里に位して『山に因り柵を爲し』八九千人を以て禦いでゐた。察するには是れは娑勒川を背後として堡城を守るよりは、河水を前面にして山塞に據り高仙芝を邀へたのであらう。折しも娑勒川は流水漲り渡り得べくもなかつた。高仙芝は是れに三牲を供へ河神を祭つて水邊に及んだところ、人馬ともに河水に浸らずして渡る事を得た。一種の奇蹟であつた。⁽¹⁵⁾是れに勢ひを得て山上に登り奮戦して敵軍を挫いた。此の山柵こそ Stein氏は Paroghil-Pass に差懸るものであると言ふ。⁽¹⁷⁾

高仙芝は尙ほ進まむとした。が監軍の邊令誠も術士の韓履冰も前途を懼れて行くを肯じなかつた。で高仙芝は弱兵三千を留めて連雲堡を守らしめる事とした。諸路の集會する要衝なる事を推知すべきであると思ふ。

高仙芝は越へて三日、坦駒嶺に達した。是れは Chavannes 氏等の稱する如く Darul-Pass に他ならない。海抜一萬五千呎に及ぶ險峻で將兵等は容易に降らなかつたが、奇策を用ひ是れを降つて、阿弩越城に殺到した。

阿弩越城には小勃律王及び公主が首領等と共にゐたと言ふ、高仙芝は是れに入城するに先んじて將軍の席元慶、賀婁余潤等を遣して國王に次の如く言はしめた。即ち『吾取汝城亦不斫汝橋。但借汝路過向大勃律去』⁽²⁴⁾と。茲に言ふ橋梁は後述する如く大勃律に通ずる唯一の『藤橋』であつた。此の藤橋が如何に彼等にとつて重要であつたかを偲び得るであらう。然るに高仙芝は愈よ城中に至るや吐蕃に心寄する首領を先づ斬り放ち、其の日に『藤橋』を切斷し去つた。王及び公主は間もなく出で、降り勃律は全く平定された。蓋し時は天寶六載(747 A. D.)の七月中であつた。

高仙芝は翌八月王及び吐蕃の公主を虜にして凱旋の途に就き、九月連雲堡に還り月末に播密川に達した。此處より戰勝の報告を朝廷に差出した。後に河西に歸つたと稱するから安西に到着したのであらう。

扱て残されたる問題として阿弩越城がある。遠征紀行に依れば阿弩越城に小勃律の國王がゐたやうである。此の點よりすれば勃律の國都の如くである。Chavannes 氏は阿弩越城を何處とも地理上の比定を試みなかつた。が大體は小勃律の國都即ち Gilit と考へたやうに見受ける。Stein 氏は Yassin と見做した。是れは坦駒嶺から僅か四日にして達し得る阿弩越城であるから極めて自然な推察であらう。のみならず氏は Gilit Valley の Dards 人が Yassin を Arnah, Arniya 等と呼んでゐるのを採り來つて阿弩越に當嵌め、阿弩越城は Yassin なりと論じた。⁽²⁵⁾

阿弩越城を Yassin 城と見る事は自分も賛意を表したい。それを Arnah, Arniya に比定し得るからのみでな

く新唐書西域傳の中に見ゆる俱位國 Yassin⁽²⁴⁾の治城『阿唃廝師多 Ashê-yü-shih-to』を畢竟『阿弩越 An-nü-üeh』と同一語原を現はすものと信するが故である。

然らば高仙芝は阿弩越城に於て小勃律王を擒へて直ちに凱旋したのであらうか。Stein 氏は正に斯くの如く解して小勃律の國都『孽多』即ち Gigit 城にまで至らなかつたと考へた。が自分は意見を異にして、阿弩越城を屠つて後、孽多城に進んで此處に國王を擒へて始めて勃律を平定したものと思ふ。冊府元龜⁽²⁵⁾及び李嗣業の列傳に『長驅至勃律城擒勃律王吐蕃公主』と傳へるは是れを證するものであらう。即ち高仙芝傳並びに通鑑に見ゆる遠征紀行には叙述充分ならざる點があつて、阿弩越城と孽多城との間に省略又は脱逸があるものと推測する。⁽²⁶⁾

- ① 新唐書の高仙芝傳及び新舊兩唐書の西域傳並びに封常清傳は天寶六載とする。舊李嗣業傳に七載と爲すのは誤りである。
- ② Stein 氏はこの行軍を現代の如何なる參謀本部をも困却せしむるものでありナポレオンのアルプス越に勝るであらうと激賞しつゝ (On Ancient Central Asian Tracks, p. 43-4.)
- ③ Documents sur les Tou-Kiè occidentaux, p. 152-4, St-Petersburg 1903.
- ④ この時 (第一回探検 1900 A. D.) は Hunza から Sarikol に出たものと Yassin を通つてゐる。我が邦の大谷伯は正にこの逆コースを採つて Gigit に入つた(後注參看)。
- ⑤ 第二回 (1906 A. D.) は Chiral→Mastuj→Yasin→Sarhad と進んだ。その報告は Serindia (1921 A. D. 刊)の第二章第三章に見出す。第三回 (1913 A. D.) は Chilas-Yassin→Mintaka Pass の順路をたどつた。その報告は Innermost Asia (1928 A. D. 刊)の第二章に精し。第二回第三回とあつた Darkot-pass 通過して高仙芝の遠征を偲んでゐる。Stein 氏全三回の綜合記録たる On Ancient Asian Tracks (1933 A. D. 刊)の第三章を見れば便利である。

- ⑥ 龜茲を安西と呼ぶ事は慧超傳の往五天竺國傳に『開元十五年十一月上旬至安西』と見ゆるのも一例である。
- ⑦ 新唐書卷四三下地理志に『安西西出柘厥關。渡白馬河百八十里西入俱毗羅磧。經苦井百二十里至俱毗羅城。又六十里至阿悉言城。又六十里至撥換城。一曰威戎城曰姑墨州』とあり。悟空記には『次威戎城亦名鉢流國正曰怛汗國』と見ゆ。撥換 Po-Hoan が鉢流 Ho-Hoan 怛汗 Pu-Han なる事は疑ひなき。Water (Huan Chwang I. p. 65) は Karayungum へ Chavannes (Turcs occid. p. 152) は Yakaryk へ。
- ⑧ 新唐書地理志に『據史德城龜茲境也。一曰鬱頭州。在赤河北岸』とあり。悟空記には『據慧德城』と見ゆ。Chavannes 氏は確言を避くる。Maral-bashi に當り (p. 153)。
- ⑨ 新唐書西域傳に『疏勒一曰佉沙……王姓婁氏自號阿摩支。居迦師城』と言ひ大唐西域記卷十二に『佉沙國。舊謂疏勒者乃稱其城號也。正音宜云室利訖栗多底。疏勒之言猶爲訛也』と稱す。佉沙、迦師は Kashgar の前半を寫したもにして疏勒は西藏語 Suleg と同語原なるべし。國名城名と區別する事は不可能と言ふべきである。
- ⑩ 新唐書卷五〇兵志に『唐初兵之戍邊者大曰軍小曰守捉』と出づ。同卷四〇地理志の安西都護府の條を見れば西方に葱嶺守捉城ありし事を知る。同西域傳には尙ほ次の如く記さる『喝盤陀或曰漢陀曰渴館檀亦謂渴羅陀……直朱俱波西。南距懸度山北抵疏勒西護密西北判汗國也。治葱嶺中都城負徒多河……開元中破平其國置葱嶺守捉。安西極邊戍也』。Chavannes Stein 氏共 Tashkurgan を爲す。
- ⑪ 悟空は往路『波蜜川』を通り玄奘は歸路『波謎羅川』を過ぐ。新唐書卷二二下西域傳に『護密北識匿也。南有商彌……東北踰山七百里至波謎羅川。東西千里南北百里。春夏雨雪。南有鉢鉢羅種多紫金。行五百里有竭盤陀』と出づるは高仙芝と通路を順逆異にするのみ。Sir-i-Koul (=Sarkol = Lake Victoria) を中心とする Valley である。
- ⑫ 新唐書西域傳に『識匿或曰尸棄尼曰瑟匿。東南直京師九千里東五百里距葱嶺守捉所。南三百里屬護密西北五百里抵俱密。高麗出身高仙芝事蹟攷 (諏訪義讓)

初治苦汗城後散居山谷。有大谷五箇長自爲治謂之五識匿……播密川四谷稍不用王號令』と出づ。Lake Victoria を經て Wakhan (後述する護密) の北方と言へば Shighnan 地方なるは明かなり。但し西域傳の記事に依つて認めらるゝ如く播密川方面に展開してゐて現今の Shighnan よりは東方にも延びてゐた事を注意すべきである。

⑬ 識匿國が唐に好意を寄せたる事は此の遠征に際して跌失伽延王が自ら從軍して戦死した事實(新唐書識匿國傳)に依つても窺ひ得る。尙ほ護密國も天寶の初めに吐蕃を離れて唐に歸投してゐた(新唐書護密國傳及び通鑑唐紀三一)。識匿國に屯し護密道を假るゝは決して故なき事でない。

⑭ Ancient Khotan p. 8-9。但し赤佛堂路、北谷路は明細に決定する事は出來ぬが地方の情況の上から斯の如きものであらうと言ふ。

⑮ 連雲堡は漢人の呼稱で娑勒城は土俗の名稱であらう。

⑯ 李嗣業の傳には夜間に渡河したと言ひその河を信圖河と稱してゐる。

⑰ Ancient Khotan p. 9。海拔一萬二千四百呎と傳ふ(On Ancient Central Asian Tracks p. 44)。Stein 氏が Sarhad を北岸とし連雲堡を南岸と見て怪んでゐる(Serindia, I, p. 67)のは唐代史料の原文に暗いからの事であらう。

⑱ 監軍は軍隊を監視する爲め中央より遣はされたもので(通典卷二十七職官九の注)、術士は吉日良辰を占ふ爲め同じく派せられてゐたものである(舊高仙芝傳)。

⑲ Ancient Khotan p. 5. Serindia I, p. 56. On Ancient Central Asian Tracks p. 43. 尙ほ最後の書には冰雪を以て蔽はるる寫眞を挿入す。

⑳ 舊高仙芝傳。

㉑ 歸路は赤佛堂路によつたと言ふ。Stein は第二回の探檢の時 Kar-wibashi に伽藍の廢墟を發見し是れを赤佛堂に比定

1) Hunza 及び Abu-i-panja に出づたものと推定した Serindia, I, p. 72.

② Documents sur les Turcs occidentaux p. 129

③ Ancient Khotan p. 10, Serindia I, p. 58

④ Chavannes, Document sur les Turcs occidentaux p. 129

但し Stein 氏は Masufj に比定し (Serindia I, p. 42) 更に阿除臆師多城を Shuyist に當つてゐる。何づれも全く認め難くと思ふ。

⑤ 冊府之龜卷三九六將帥勇敢三。

⑥ 自分は薩多城を (阿除) 臆師多城に比定して小勃律を Yassin 地方に見做し (Stein 氏は Ancient Khotan 及び Triglit 地方に考へて Serindia I, p. 18 に至ると Yasin 地方に爲してゐる) Hunza の首府を Balid と稱する (大谷版新西域記上巻パミール記行 p. 30, ギルギット通信 p. 34 参照) 點より大勃律を Hunza 地方に想定する考へがない譯でない。が上述の如き推測を一層強く感じてゐる。

五、國際情勢の變化

勃律の征服を決定的ならしめたものは『藤橋』の切斷であつた。藤橋に關しては舊唐書高仙芝傳に『去勃律猶六十里及暮纔斫了』とあつて勃律を去ること六十里で恰も一日行程の地點にあつたと言ふ。此の勃律を如何に解するか依つて藤橋の位置が定まつて行く。Stein 氏は是れを阿弩越城と爲し Yasin に當つた。藤橋は自らその南方

十二哩ほどにある Gupis 附近^②であると考へた。が是れは『勃律の國都』であり、寧多即ち Girit 城と認むべきである。Chavannes 氏も特に de (la capitale du) Poulou と補譯してゐる。従つて藤橋はそれより南方にあつた。此の時考慮に入れねばならぬのは藤橋が娑夷水即ち Girit-R の上に懸り且つ直接、大勃律に通ずる唯一の橋梁であつた事である。是れを Gupis の附近に認めては大勃律の Baisam よりは可成りの距離があり又橋梁も一つには止まらなかつたであらう。是等の事情より推して自分は藤橋を Girit-R の將^⑤ Indus 本流に合せむとする地邊に定めたいと思ふ。

抑も藤橋は吐蕃が小勃律に策動せむが爲めに設けしめたもので僅かに一箭の達し得る程度のものであつたが是れを造るのに約一ヶ年を要した^⑥。小勃律は是れに依つて吐蕃の援兵を期待してゐたのであつた。高仙芝は一度その藤橋を斷せずと宣言したが、それは手段であつて小勃律の國都に入るや直ちに部下を派して切斷した。吐蕃の大兵が來つた時は既に如何ともする事が出来なかつた^⑦と傳へる。王及び吐蕃は餘儀なく出で、降つた。

かくして藤橋の切斷は吐蕃と小勃律との關係を切斷した。が更らに吐蕃と西北諸國との交渉をも切斷せしめた。勃律平定の意義は寧ろ後者に存したのであつた。新唐書高仙芝傳には『於是拂菻大食諸胡七十二國皆震攝降附』と記す。固より支那一流の表現ではあるが、葱嶺南西邊の弱小諸國を唐朝に歸欵せしめたことは事實であらう。

李嗣業^⑧の傳を緋けば勃律が征服されて拂菻大食等の七十二國が朝獻するに及んだのは全く『嗣業之功』であると言ふ。此の戦役で最も勇名を馳せたのは李嗣業であつた。連雲堡の激戦で吐蕃が盛んに礮^⑨を放つて來たのに對

して李嗣業は陌刀隊を率ひて自ら陣頭に立つて奮鬪した。高仙芝には嗣業の外に封常清、段秀實等の如き特殊な部下もあつた。勃律征服の輝かしき勝利の裏には是等の活動があつた事を見逃してはならぬ。孔徳氏に據れば羯鼓曲の中に『破勃律』の一篇があると言ふ。恐らく此の戦勝を讃へたものであらう。捷報が天朝に達した時、玄宗は取敢へず高仙芝を鴻臚卿御史中丞に補した。次いで夫蒙電管に代つて安西節度使と爲した。¹²⁾ 通鑑に従へば後者は天寶六載十二月己巳の日であつたと傳ふ。厚く遇せられたと稱すべきである。是れより高仙芝は西域經營に思ふまゝの獨裁權を振ふ事となつた。羯師及び石國の討征はその現れであつた。

翻つて小勃律の王、蘇失利之は擒へられて唐に入朝した。冊府元龜卷九七五(外臣部褒賞)の天寶七載八月の條に『戊申勃律國王蘇失利之及三藏大德僧伽羅密多並來朝。授伽羅密多鴻臚員外卿放還蕃。賜蘇失利之紫袍金帶。留宿衛給官宅』と見ゆる。王は遂に京師に留まつて天子の宿衛に任じたのである。そして小勃律の故地には『歸仁軍』が置れて全く唐の領土となつた。歸仁軍の設置は天寶六載中の事であつたと推測する。新唐書小勃律傳には『募千人領之』と稱するが舊唐書李嗣業傳に據れば『以兵三千人戍』と言ふ。唐の極遠の鎮軍と言ふ事が出来る。是より後、小勃律を『歸仁國』¹¹⁾とも稱するのは此の故に他ならぬ。

が此の鎮軍の糧食を南方の箇失密 Kashmir に仰がねばならなかつた。茲に羯師との問題を生じた。

① その反面、藤橋の位置に依つて國都が推定されて行くであらう。

② Ancient Khotan (I p. 10) には Gupis と明云やちやちと合流點附近とし Innermost Asia (I. p. 37) には明かに Gupis

と決定してゐる。

- ③ Documents sur les Turcs occid. p. 153
- ④ 前掲の『吾取汝城亦不汝橋。但借汝路過向大勃律去』と言ふ言葉、及び後述の吐蕃の來援情況等に依つて窺ひ得る。
- ⑤ Hunza Dairi 等の流河を横切らねばならぬし *Qizil Ar* を早く西岸に渡つたとしても二回は橋梁に依らねばならぬ。
- ⑥ 大谷家藏版『新西域記』上卷 P. 51 に『漸くギルギットの大吊橋を見る……橋に達す。又爰に禁令の標示ありて同時に三頭以上の馬匹の通過を許さず。其橋の長さ五百尺幅五六尺。之れを渡るに頗る動搖を感じず』と見ゆ。本文に言ふ『藤橋』ではないが構造を思ひ浮べ得るであらう。同書所収『パミール紀行』『ギルギット通信』は當地方研究の重要文獻である(支那佛教史學一の二拙文紹介參看)。
- ⑦ 兩高仙芝傳。
- ⑧ 舊書卷一〇九新唐書卷一三三八。
- ⑨ 舊李嗣業傳及び冊府元龜卷三九六(前述)等に『拋楯蔽空而下』と言ふ。楯は砲石、楯は木片、陌刀は長刀にして當時の攻防武器を察し得るであらう。
- ⑩ 封常清は文藻ありて軍律を持し段秀實は勇敢にして道義を持した。
- ⑪ 孔徳、外族音樂流傳中國史 P. 34
- ⑫ 高仙芝が入朝し夫蒙靈魯も呼び返へされて朝廷に遇會する様子を高仙芝傳に興味深く述ぶ。
- ⑬ Karanirua?。佛僧が此の頃、屢々諸國の王使として來朝してゐる。何づれ機會を見て概觀したい。
- ⑭ 冊府元龜卷九七一外臣部朝貢、天寶七、十一、十四載等の條を見るべし。

六、羯師の叛謀

天寶六載小勃律平定の後、吐蕃は全く閉塞されたであらうか。それに就いて注意すべき記載が新唐書西域傳の吐火羅の條にある。

(開元天寶間數獻馬……)其後鄰胡羯師謀引吐蕃攻吐火羅。於是葉護失里忙伽羅巧安西兵助討。帝爲出師破之。是れは甚だ簡單な叙述であるが羯師が吐蕃を誘つて吐火羅を攻めたので吐火羅王の求めに依つて唐が兵を出して破つた事を示してゐる。此の吐火羅の王、失里忙伽羅の名は失里忙伽羅として通鑑に出てゐる。

(天寶八載)十一月乙未吐火羅葉護失里忙伽羅遣使表請。羯師王親附吐蕃困苦小勃律鎮軍阻其糧道。臣思破兇徒望發安西兵。以來歲(五)正月至小勃律六月至大勃律。上許之(唐紀三二)

是れに従へば天寶八載十一月に遣使來朝して表請する處があつたのである。此の表文は唐會要卷九九吐火羅の條に見えない事もない。が冊府元龜を啓けば殆んどその全文を發見し得る。貴重なる史料ゆゑ長文を厭はず掲出してみよう。

八載吐火羅葉護失里忙伽羅遣使來朝獻表曰。臣隣境有一胡號曰羯帥(帥)居(帥)在深山恃其險阻背聖化親輔吐蕃。知勃律狹人稠無多田種鎮軍在彼糧食不充於箇失密市易鹽米然得支濟商來往皆著竭(帥)過。其王遂受吐蕃貨求於國內置城堡

捉勃律要路。自高仙芝開勃律之後更益兵三千人勃律囚之。^(因) 羯帥王與吐蕃乘此虛危將兵擬入。臣每憂思一破兇徒若開得大勃律已東直至闕焉耆^(于) 涼瓜肅已來吐蕃更不敢停住。望安西兵馬來載五月到小勃律。六月到大勃律。伏乞天恩允臣所奏若不成請斬臣爲七段。緣箇失密王向漢忠赤兵馬復多土廣人稠糧食豐足特望天恩賜箇失密王勅書宣慰賜衣物并寶鈿腰帶使感荷聖恩更加忠赤。帝覽表許之(卷九九外臣部請求)

この中、特に關心を呼ぶものは(一)勃律の鎮軍が箇失密より糧食を仰いでゐたこと(二)吐蕃が羯帥に城堡を設けて箇失密との要路を脅かしてゐたこと(三)進んで羯帥吐蕃が勃律に侵入を企てゐたこと等である。

箇失密 Kashmir と勃律 Gilgit との交通路に關しては、悟空の『入竺記』に所傳がある。即ち『其國(迦濕彌羅)四周山爲我郭。總開三路以設關防。東接吐蕃并通勃律西門一路通乾陀羅。別有一途常時禁斷天軍行幸方得暫開』と出づるもので、この中、北路を以て交通してゐたのであらう。更らに茲に『天軍』とあるは『天可汗』の軍隊の事であり、唐に好意を寄せてゐたかを察し得るものである。箇失密が勃律の鎮軍に糧食を供給してゐた事は決して有り得ない事ではなく、既に高仙芝の勃律遠征以前より申出てゐた。新唐書箇失密傳の中に『有如天可汗兵至勃律者。雖衆二十萬輸糧以助』^③と洩らしてゐる。冊府元龜を照すれば是れは開元二十一年の上奏であつた。蓋し勃律平定の後、歸仁軍の糧食が箇失密より補給されたと言ふ事は寧ろ當然であらう。此の吐火羅の表文によつて其の事實が一層明瞭となつた。その交通路を妨ぐる羯帥とは抑も如何なる國であつたか。

吐火羅は言ふまでもなく Tokhara を現はし阿綏城 (War-waliz, Kunduz)^④ を中心とする Badakhshan 地方で

あつた。羯師はその鄰胡であつた。Chavannes氏は唐代の突厥史料を譯述したが、羯師を何つれの地方とも比定しなかつた。たゞ『羯師』と『劫國』とは同じだと見做した。Stein氏は此の指示に基いて新唐書の西域傳に『劫者居葱嶺中。西及南距睢彌。西北挹怛也』とあるのを考證し Chirai 地方であると決定した。尙ほ氏の説に従へば Chirai Valley を今も Kashkar と稱してゐると言ふから、承認すべきである。此の羯師が吐蕃に通好すれば容易に箇失密との孔道を禍し得たのである。

想ふに吐蕃は小勃律を失つて後、更らに南方の聯盟線を案出したのであらう。先づ羯師を掌中に入れ進んで吐火羅に働きかけた。此の際、果して吐火羅を攻めたか否か明かでないが、小勃律より護密安西を繼ぐ政策線よりも多少迂廻しなければならなかつた。是れは已むを得ぬ結果であつた。が唐としては安西まで進出せられないにしても、小勃律を保つのに困難を感じた。吐火羅の奏請によつて起ち立つたのも宜なることであつた。

唐が出兵して羯師を破つた事は西域傳の記載で疑ひないが、新舊兩本紀に見へず、通鑑考異に依れば玄宗實錄にも無くて而も天寶九載三月の條に至つて突如として羯師王素迦を新しく國王に冊すと見ゆ、と言ふ。通鑑の九載の條に『三月庚子立勃特没之兄素迦爲羯師王』と傳ふるは是れを承けたのであつた。然るに其の封冊文が冊府元龜に残つてゐる勃特没の廢せられた事も明かとなつた。即ち征服は是れより以前にあつた。

此の時、征討に従事した人が問題となる。勃律を既に征服し安西節度使の任にあつた高仙芝が何等の關係も有しなかつたとは考へられぬ。が唐代の史料には見當らない。司馬光は天寶十載正月高仙芝が後述する石國の王等

と共に羯師王を奉獻したと言ふ事實より、羯師を征伐したのも高仙芝であつたと断定した。自分も正鵠を得たものと認めたい。

今や羯師遠征の記録は殘存せぬ。が勃律の遠征にも勝る大行軍であつたと思ふ。吐火羅の奏請に従つたとすれば葱嶺を南下して小勃律を通り東方より攻撃を加へたものと推察する。かくして羯師は平定され吐蕃は封鎖された。

于闐の王、尉遲勝と蘇毗、播仙を撃つて破つたのも此の頃であつたと思ふ。蘇毗は西藏文の『于闐懸記』に So-byi と出づるもので隋書の女國、唐書の孫波等に當り、播仙は古の且末城であつた。

是れで安西の南邊から葱嶺の南面一帯に亘つて、高仙芝の威令に服する事となつた。が頓みに新興勢力を加へ來つたのが大食であつた。

- ① 吐火羅を攻めた事は此の西域傳に出づるのみで後述する會要、冊府元龜には攻めたやうに記さない。注意に價する。
- ② 羯師羯師は同一なるものである。
- ③ 簡失密王木多筆が嗣位を報じ來つた時の言葉。唐よりの封冊は開元二十一年四月であつた(冊府元龜卷九六四外臣部封冊二) 佛敎が簡失密より盛んに入り來る事も決して過然でないことを氣付くべきであらう。
- ④ Turcs occid p. 155 N. 6, p. 150
- ⑤ Turcs occid p. 159, N. 3.
- ⑥ Ancient Khotan I. p. 15.

白鳥博士は劫國を羯師の略稱と見做す事に反對しておられる（西域史研究上 p. 137）が羯師を Chitral 及び Kashkar の音譯と見る事は認めておられる。

⑦ 册府元龜卷九六五外臣部封册三。

⑧ 尉遲勝の列傳に依れば天寶初年に入朝し宗女を得て國に還り安西節度使の高仙芝と是等の國を攻めたと傳へるから此の頃に見ねばならぬ。

⑨ 支那佛教史學一の四拙稿參看。

⑩ 新唐書卷四三丁地理志。

七、怛邏斯戰の展開

茲に言ふ怛邏斯の戰は唐と大食が西域に於て覇を争つた一大決戰であつた。それには石國との關係より究明を進めねばならぬ。

石國は支那の記録に柘支柘折又は赭時など^①と記され今の Tashkent 地方に當つてゐた。^②隋の大業年中に西突厥に國を奪はれ其の支配下となつたが、唐代に入るや唐室にも好みを通じて開元の初めその封册を受けた。^③が此の頃になると大食の壓迫が加はつて、累りに使者を唐に出し來つた。その間の消息を物語るものとして開元二十九年その王伊捺吐屯屈勒の上呈した表文を見る專が出來よう。唐會要にも出づるが是れを要するに『今突厥已屬天

「可汗惟大食爲諸國患。請討之」(新唐書石國傳)と言ふのにあつた。が玄宗は是れに應じなかつた。大食の進展に對しては唐は何等方策が建つてゐなかつたやうに思ふ。例へば是れより先き俱密王那羅延が大食の苛酷なる賦税に苦しんで訴へ來つた時も玄宗は「但慰遣而已」(西域傳)と傳へる。それ故、大食に服従を餘儀なくされたのも自然の成り行きであつた。

かゝる時、西域に於ける安定勢力として乗り出したのが唐の高仙芝で小勃律を平け羯師を服し吐火羅を招いて意氣頗る昂かつた。偶ま石國に藩禮なきを理由として朝廷に征討を請ふた。それが許されたのであらう。天寶九載(75) A. D.)石國を討伐した。それは本紀にこそ書かれてゐないが高仙芝の列傳に新舊ともに明記せられ、通鑑會要など又、參照し得る。たゞ李嗣業傳に天寶十載と爲すは採るを得ざるところである。

翌十載正月高仙芝は石國王を擒へて入朝した。新唐書の玄宗紀正月の條に「戊申安西四鎮節度使高仙芝執突騎施可汗及石國王」と見ゆる。通鑑に依ればこの時、開府儀同三司を加へられ河西節度使に任ぜられたと言ふ。が河西節度使のみは安思順が深く留任を請ふたから其の儘となつた。

併し此の石國王に對する處置が意外の反響を呼び起した。その石國王は天寶五載唐より懷化王に封ぜられた那俱車鼻施であつた。新唐書及び會要は王が降る事を約したのに高仙芝がそれを俘へたと稱する。が事實は左に傳ふるが如きものであつたと信ずる。

安西四鎮節度使高仙芝僞與石國約和。引兵襲之虜其王及部衆以歸。悉殺其老幼、仙芝性貪掠得瑟瑟十餘斛黃金

五六橐駝。其餘口馬雜貨稱是皆入其家（通鑑唐紀三二）

即ち和約を申入れておいて王を擒へたのであつた。勃律遠征の時も相當に術策を弄してゐるから勝利の前には方法を選ばなかつたであらう、そののみならず石國王を朝廷に獻じて闕下に斬つたと言ふ。是れは新唐書に見えるが舊唐書には出てゐない。従つてまた後者には高仙芝に都合の悪い怛邏斯の敗戦を言及してゐない。

兎も角、以上の如き高仙芝の態度が石國の王子を痛く動かし、諸胡の中に逃れて暴狀を訴へ、遂に大食に頼らしむる事となつた。

大食は阿刺比亞の摩訶末教國を稱するもので時に多氏大食又は大石とも記されてゐる。察するに唐代の波斯人が Tazi⁽⁷⁾ と呼んだのを支那人が傳へ聞いたのであらう。贅言するまでもなく是れは Mohammed に依つて創設された宗教王國であつた。が西曆第八世紀の中葉、大革命が起つた。即ち從來の王家 Onmeya に代つて Abbās 家が王統を繼ぐ事となつた。それは唐室の史料にも現れてゐる。今舊唐書大食傳の記載を引用してみよう。

摩訶末後十四代至末換。末換殺其兄伊疾而自立。復殘忍其下怨之。有呼羅珊木驪人並波悉林舉義兵。應者悉令着黑衣旬月間衆盈數萬鼓行而西。生擒末換殺之。遂求得奚深種阿蒲羅拔立之。末換已前謂之白衣大食自阿蒲羅拔後改爲黑衣大食。

茲に見ゆる末換は Onmeya 家の王 Merwan で阿蒲羅拔は Abbās 家の王 Abul Abbās である。所謂白衣大食より黑衣大食に移つた革命事件を把握し得よう。が重要視すべきは此の際、呼羅珊 Khorāsān の木驪 Merw の人、

並波悉林 Abū Muslim に依つて革命が達成された事である。呼羅珊は大食の中亞經營の中心地で Ommeya 家の祖 Mo'avia が波斯に東方都督を置いた時、呼羅珊にその副都督を設けたのに始まる。それより康國石國等の胡國に逼りつゝあつたが、大食本地の革命に關係した並波悉林が東方の經營に當るや積極的に働きかけて來た事は想像に難くない。革命成功の翌年 (751 A. D.) 即ち天寶十載石國王子の求めに應じて起つた。高仙芝と相遇ふたのが恒羅斯であつた。

恒羅斯 Tiras は通典並びに新唐書西域傳の石國の條に依れば碎葉 Tokmak の西方に位し石國は常に兵を派して守つてゐたと言ふ。石國東邊の要地であつた事を認め得るが現今の土地に求むれば Turkestan 鐵道の要點 Ande-ala^⑨に當つてゐた。嘗つて開元二十七年夫蒙靈客が黑姓可汗爾微を擒へた處でもあつた。

此の時の戰況は高仙芝傳や石國傳には寧ろ見當らずして戰鬪に猛進した李嗣業や段秀實の傳に發見する事が出来る。が最も要領を得たる資治通鑑唐紀三二を以て語らしめよう。

仙芝……將蕃漢三萬衆擊大食。深入七百餘里至恒羅斯城與大食遇。相持五日葛羅祿部衆叛與大食夾攻唐軍。仙芝大敗士卒死亡略盡所餘數千人。右威衛將軍李嗣業勸仙芝睿源。道路阻隘拔汗那衆在前人畜塞路。嗣業前驅奪大挺擊之人馬俱斃。仙芝乃得逃。

高仙芝は蕃漢三萬の兵を率いて赴いたと言ふ。其の中には必ずや葛羅祿 Karluk 拔汗那 Fergana の兵もあつたであらう。がそれ等に裏切られて大敗を喫した。新唐書立宗紀の天寶十載の條に

七月高仙芝及大食戰于恒邏斯城敗績。

と書殘さるゝのは是れである。

此の責任は唐朝から如何に問はれたか不明であるが、其の年高仙芝は思ひ出深い安西の地を去つたやうに推察される。

- ① 新唐書石國傳、大唐西域記卷一。Chaj を寫したものの。
- ② Documents sur les Turcs occid., p. 14, 140, N. 4, Tash (石) kend (町)なり。
- ③ 冊府元龜卷九六六外臣部繼襲。
- ④ 唐會要卷九九石國。冊府元龜に見當らぬ。
- ⑤ 新唐書石國傳。唐會要卷九九石國。
- ⑥ 大唐求法高僧傳南海寄歸傳は多氏と言ひ往五天竺國傳は大窻と稱し繼業記は大石と記す。
- ⑦ T'ai T'ai 等とも言ふが高桑氏の說に従つておく(東洋哲學二七の一、大食語原考)。
- ⑧ 通典卷一九三石國。
- ⑨ Awliya-ata 之 傳 見 Yule: Cathay and the way thither I. p. 60.

八、恒邏斯敗戦の影響

高仙芝の恒邏斯に於ける敗戦の影響に就いて Stein 氏は次の如く述べてゐる。

It is certain that the complete defeat of Kao-Hsien-Chih by the Arabs in the year following(751 A. D.) and the consequent rapid decline of the Imperial Power in the "Western Country" must have forced the Chinese to abandon their position in Gilgit, and the relation maintain through it with such as Kāshmir, Kābul, and Uḡjāna (Ancient Khotan I p. 10-11)

如何にも惨敗の爲め唐朝の威信を急速に失墜したのに相違ない。が多少、考慮に入れねばならぬ事實もあるのでその過程を究めてみよう。

舊唐書封常清傳には天寶十載(751 A. D.)王正見が安西節度使に任ぜられ封常清が行軍司馬に補せられたと傳へる。是れに依つて高仙芝は天寶十載の中に安西を去り王正見が是れに代つたものと知る。王正見は天寶七載の頃すでに北庭節度使となつてゐたから取敢へず高仙芝の後を兼攝せしめたものであらう。然るに翌十一載になると王正見が急死して^②、封常清が安西節度使を繼いだ。封常清は越えて十二載大勃律を遠征した。

此の事件は封常清の列傳にも見えず、唯舊唐書の段秀實傳と通鑑に瞥見するのみである。

十二載封常清代仙芝討大勃律。師次賀薩勞城^③。一戰而勝常清逐之。秀實進曰賊兵羸餌我也請備……殲其伏改緩德府折衝(舊傳)

此の中に記さるゝ如く大勃律を屠つて緩德府を設けたとすれば或は高仙芝の時代よりも南方に伸展を爲したものの

とも言へよう。通鑑唐紀三四を啓けば『綏德府折衝段秀實云々』と見ゆる。暫定的にして綏德府が置かれたものと断定してよい。

が安西に於ける唐朝の威信は遂に昔日の如きものでなかつた。天寶十三載三月北庭都護の程千里が朝廷に歸ると封常清は北庭都護を兼ね尙ほ伊西節度使をも命ぜられた^⑤。是れは唐の消極政策の現れで名義上のみの支配となつた。天寶十五載安史の大亂が勃發した時、封常清は唐室に入朝してゐた。全く偶然であつたか或は理由があつたかは不明であるが、その後國內の問題に没頭して唐の勢力は西域の地から拂はれた。是れが僅か四五ヶ年の間の變轉であるから Stein 氏の如き速斷を爲すのも無理からぬ事である。

かくして多少の曲折はあつたとしても西域に於ける唐の支配は怛邏斯の一戰を契機として衰亡に傾いた。大食が是れに代つて進出を逞しくしたのは當然であつた。が想起すべきは文化的な影響であつた。

怛邏斯の敗戦は唐にとつて悲慘を極めたものであつた。杜佑は通典の中に兵七萬を没すと言ふ。多くとも蕃漢六萬を以て向つたのであるからは是れは確かに誇張の跡がないではない。が通鑑は前述の如く『士卒死亡略盡。所餘纔數千人』と稱する。戦死したのも多かつたであらうが又捕虜となつたものも少くなかつたと推察する。

桑原博士は嘗つて東洋に於ける四大發明の一として紙の發明を挙げ支那に於て案出された製紙の方法が怛邏斯の戦で敗れた支那人に依つて大食に移され更らに西歐に普及したと論ぜられた^⑥。今茲にそれを再述するを要せぬが、摩訶末教國の規定では捕虜は總べて奴隸と爲す由であつたから、高仙芝の軍中にあつた製紙職工が大食で利

用されるに至つたのは事實であつたらう。大食の史料に依れば戦後間もなく Samarkand に製紙工場が建てられたやうである。^⑨

製紙職工のみならず他の工匠もあつて支那の文明を傳播した事は容易に想像される。後述する杜還の『經行記』に見ゆる大食の一節は留意すべきものと思ふ。

漢匠起作畫者京兆人樊淑劉泚。織絡者河東人樂隕呂禮。（通典卷一九三）

是れは杜還が大食に至つた時すでに在住してゐた人と考へられぬ事もない。が必ずや杜還と共に怛邏斯の戦に敗れて大食に伴はれた支那人であつたらう。彼等が西方文明に影響を與へた事は疑ふ餘地がない。

杜還是通典の外に史料がない。その記すところに従へば

族子環隨鎮西節度使高仙芝西征、天寶十載至西海寶應初因賈船舶自廣州而回。著經行記（通典卷一九一）西域總序注

と出づる。杜還是杜佑の一族であつた。が天寶十載高仙芝に従つて怛邏斯の大戦に出で捕虜となつて大食に行つたのであつた。天寶十載(751 A. D.)に西海に至つたと稱すれば怛邏斯の戦後、直ちに送られたのであらう。寶應元年(762 A. D.)南海を経て歸り來つたのであるから約十年間は大食に在つた。その間、彼れは何事に従つたかは明かでないが支那の文明を傳ふるに力あつたものと信ずる。

彼れは歸朝して『經行記』を著した。散佚し現存しないが通典の中に引用されて大體を揣摩する事は出来る。彼れの事情及び文明を理解するに役立つたと認むべきである。

- ① 新唐書石國傳。通典卷一九二石國注。
- ② 舊唐書封常清傳。
- ③ 通鑑唐紀三二には『菩薩勞城』と言ふ。大勃律の都城か。注意すべきものであるが史料なく比定を後日に譲る。
- ④ 至德元載(756 A. D.)七月の條にあり。
- ⑤ 舊封常清傳及び通鑑に見ゆ。
- ⑥ 通典卷一八五西域總序注。
- ⑦ 通鑑三萬、李嗣業傳二萬と言ひ段秀實傳に六萬と稱するのが最も多し。
- ⑧ 東洋文明史論叢『隋唐時代に支那に來往した西域人に就いて』p. 421
- ⑨ Chavannes : Turcs occid. p. 297-s

九、異族の榮進

玄宗の治世を通常、開元天寶の時代と呼ぶ。固より開元と天寶は連続せる一時代の流れである。がその政治性格は全く異つてゐた。開元年間は大體に於て政令よく整ひ國內平靜に歸して世に貞觀の治と並び稱せられる。^①天寶年間はその余慶を承けたとは言へ極めて不自然なる政治形態を爲して國家は累卵の危きにあつて末年遂に動亂を生じた。

顧るに開元の治世は何づれに基いたか。それは玄宗の精勵と賢相の輔弼に依つたのであろう。玄宗は武韋兩后

に依つて禍された朝廷^②を改革し自ら進んで諸般の範を垂れた。奢侈を戒め政務を勵んだ様子は後年の玄宗を想像も出来ない程であつた。彼れに用ひられた宰相も姚崇宋璟を始めとして各々特性を有するもので銳意、玄宗を輔佐した。茲に於てか開元の末葉には『天下又安。雖行萬里不持兵刀』^③と言はるゝ如き昇平を來たした。

が玄宗は開元の末年に近付くにつれ漸く情氣を生じ政治を怠り奢欲に走り初めた。張九齡が未だ朝廷にあつた間は直言を以て是れに當つたから弊害を生じなかつた。彼れが相位を去つてからは倭倅の臣のみとなり、全く政務を顧みず宮中深く逸樂に耽る有様となつた。

天寶の弊政は玄宗の逸樂にもよるが自分は寧ろ姦臣の跳梁にあると思ふ。天寶年間の宰相として記憶から去り得ざるは李林甫と楊國忠であらう。が中にも天下の亂階を啓きしものは李林甫^④であつた。

彼れは身、李唐の一族であり乍ら閹宦妃嬪の援助によつて榮達を爲し、開元二十二年始めて臺閣に列り天寶十一載刺客に怯えつゝ息を終るまで、前後凡そ十九年、全く朝政を私した。その間、政治に倦みたる玄宗の寵倅を専ら固め、自己の權勢のみを計つた。彼れが其の爲め所謂『逆耳之言路』を塞いだ事は一般に周知である。玄宗はかくして世は昇平なりと信じ、甘んじて宴樂に浸つてゐた。が李林甫は更らに見逃すべからざる姦策を建てた。即ちそれは『蕃將專任』の策であつた。舊唐書の李林甫傳には『出將入相之源』を杜ぐと言ふ。曰く

武德貞觀已來蕃將如阿史那社爾契苾何力忠孝有才略亦不專委大將之任。多以重臣領使以制。開元中張嘉貞王陵張說蕭嵩杜暹皆以節度使入知政事。林甫固位志欲杜出將入相之源嘗奏曰。文士爲將性當矢石不如用寒族蕃人。

蕃人善戰有勇寒族即無黨援帝以爲然。

茲に出將とは邊境に出任せる將帥の意である。唐朝は初め異族出身の蕃將にして勝れたるものありとしても専ら大將と爲さず、必ず朝廷より重臣を出して將帥に任じ是れを制配せしめた。阿史那社爾（突厥）が高昌を伐つた時、侯君集を大總管と定め、契苾何力（鐵勒）が高麗を征した時も李勣を大總管と爲した。特に開元年間に及ぶと京官にして才略あるものを外官に出し、外官にして政績あるものを京官に任じて『出入常均』の制を建てた。是れは極めて方策を得たものであるが、此の爲め節度使として成績あるものが屢々朝廷に歸つて宰相となつた。前掲の張嘉貞王峻等は何づれもその人々である。李林甫は是れを深く忌み遂に出將には専ら蕃人寒族を用ふべき事を奏請した。その主張に依れば蕃人寒族は一身を顧みず勇敢にしてよく戦ひ、是れに恩賞を厚く施せば愈々盡忠の至誠を致すであらうと言ふのにあつた。玄宗は是れを許し、始めて蕃將專任の法が建てられた。是れより安祿山高仙芝哥舒翰等が擡頭して來たのであつた。この結果は邊境に強兵を養ふ事となつて中央の劣弱なる募兵とは均衡がとれなくなつた。安史の内亂は安祿山を俟たずとも必然に起るべき運命を藏してゐた。

高仙芝は安西節度使として西域に絶對權を振つた。兵馬財政統治すべての權力を委ねられてゐたから勢力の赴くところ暴逆に流るゝもやむを得なかつた。が幸か不幸か在任約五年にして西域を去つた。後、天寶十四載密雲郡（河北昌平）^④公に封ぜられた。尙ほ餘榮ある生活を送り得たと言ふべきである。由來、任官は久しきに亘り廣きに及ぶと弊害を自ら生ずるものである。唐代の初期、遙領と久任と兼統を避けたと傳へるが實に故なき事でない。が

開元の末葉より天寶に進んで綱紀漸く亂れて是れが行はれなかつた。異族にして久任と兼統を恣まゝにしたるもの即ち安祿山であつた。

- ① 舊唐書卷九玄宗紀論に『志在昇平。貞觀之風一朝復振于斯時也』と言ふ。
- ② 趙翼二十二史劄記卷一八女禍。參見。
- ③ 舊唐書玄宗紀開元二十八年の條にあり。
- ④ 列傳（舊唐書卷一〇六新唐書卷二二三上）。
- ⑤ 舊唐書太宗紀貞觀十四年の條。
- ⑥ 舊唐書太宗紀貞觀十八年の條。
- ⑦ 通鑑唐紀二七開元二年の條。
- ⑧ 全唐文の中に見出し得ず。
- ⑨ 舊高仙芝傳。清高斯同、唐功臣世表にも見ゆ。
- ⑩ 通鑑唐紀三三。

十、安祿山の違反

安史の大亂を惹起した安祿山は異族であつた。營州柳城（熱河朝陽）の雜胡であつた事は唐代史料の等しく認むるところである、が舊唐書安祿山傳は『本無姓氏』と言ひ新唐書は『本姓康』と稱する。桑原博士の論ぜられた如く①

康國出身にして營州附近に來住してゐた商賈を父として生れたのであらう。母は突厥種であつた。後に安姓の延
偃なるものに嫁したから祿山も安姓を冠するやうになつた。長じて六蕃語を能し『互市牙郎』となつた。出自より
考へて諸蕃語を繰る通商關係の役人になつたのは自然であつた。偶ま幽州節度使の張守珪に見出されて『捉生將』
となつた。是れが出世の端緒で、僅か五騎ほどを以てよく契丹數十人を擒へ得たから次第に部下を増された。『討
てば越ち尅つ』と言ふ有様で遂に一方の偏將とされた。生來その性が『殘忍にして多智、よく人情を憶測した』と
傳へらるゝ者であるから巧みに張守珪に取入つて彼れの『養子』となつた。是れより迅速なる上達を爲した。

張守珪に見出されたのは開元二十年前後であつた。⑥二十八年に平盧兵馬使に擢でられ二十九年には營州都督、
平盧軍使に任ぜられた。⑧翌天寶元年には平盧節度使となつて驃騎大將軍をも加へられた。異族出身者としては超
スピードの成功であつた。

是れには張守珪の推薦もあつたが安祿山自ら朝廷よりの往來者に贈賄を爲して榮達を計つた。凡そ好言令色と
贈與奉違は何時の時代にも存するが此の頃ほど甚しきはなかつた。開元末期より天寶に懸けて李林甫高力士を中
心とする朝廷の内外は腐敗し切つてゐた。中にも安祿山は康國の出身にして商賈の本領を發揮し、人情の機微に
投じて榮進を爲して行つた。是れは中央に直接出入するやうになつて一層著しく寧ろ悽慘な感じさへ覺えしめた。
安祿山が唐室に入朝したのは天寶二年であつた。⑩三載には范陽節度使を兼ね幽州に治した。然るに翌四載、楊
貴妃が冊立せらるゝや巧妙に是れに近接して其の『養兒』となり楊家一族と關聯を爲して玄宗を完全に籠絡するに

至つた。六載、御史大夫に除せられ九載、東平郡王に封ぜられた。舊唐書玄宗紀にも特に『節度使封王自此始也』と稱してゐる。邊將榮進の途も極度に開かれたと言ふべきであらう。越えて十載自ら求めて河東節度使を并せた。^⑭是れで三節度使を兼攝する事になつたが京師に對する威壓は正に出來上つたのである。

察するに安祿山は唐室に入朝するまでは唐朝の顯官榮位を望んでゐた。が親しく朝廷の内外を聞見するに及んで唐朝覆滅の野心を抱くやうになつた。此の爲め彼の努力を拂つた二點を指摘してみよう。一は奚契丹同羅等より降り來つた者を直系軍として育成し^⑮二は商賈を盛んに諸方に出し軍資の蒐集に勉めた。^⑯すでに權あり兵あり資あつて、何時にても反旗を翻し得た。が朝廷には李林甫があつて安祿山の異志を夙に洞察してゐた。安祿山も明察巧智の李林甫には頭角を擡げ得ず、彼れの前に出でては冬日も尙ほ汗したと傳へる。それ故、彼れの在世中は如何とも爲す事を得ず又、玄宗の恩寵には聊か感ずるところあつて、崩御の後に於て事を擧げむと志した。が天寶十一載李林甫卒し、次いで楊國忠と反目し初め、太子の賢明を憚るに至つて、遂に天寶十四載(755 A. D.)十一月范陽に叛いた。舊唐書玄宗紀の十四載の條に

十一月……丙寅范陽節度使安祿山率蕃漢之兵十餘萬。自幽州南向指闕。以誅楊國忠爲名。

と見ゆる。愈々幽州を出發するまでは可成り軍を起すのに苦心した。その顛末は新舊兩唐書の安祿山傳に精しく出てゐる。折しも國內は昇平に安じて武備全く弛み、忽ちにして河北は賊軍の手に歸した。十二月安祿山は黃河を渡つて東方より陳留を経て洛陽に迫つた。初め玄宗は是れを信ぜず事實と知るや狼狽おく能はず、幸にして京

師に來つてゐた封常清に問ふて方策を建て高仙芝を引出して防がしめる事とした。封常清と高仙芝は西域にあつて共に活躍したものであつた。

① 東洋文明史論叢 p. 333

② 新舊兩列傳安祿山事迹上等。通鑑のみ『延德』に作る。

③ 別傳による。安祿山事迹上には『長而姦賊殘忍。多智計善揣人情。解九蕃語爲諸蕃市牙郎』とあり。

④ 新安祿山傳。

⑤ 安祿山は八千人の養子を持ち、自らも亦楊貴妃の養兒となつた。當時の社會風潮を見る事が出来る。

⑥ 舊安祿山傳。

⑦ 舊安祿山傳。

⑧ 通鑑唐紀三〇。

⑨ 兩安祿山傳。舊傳通鑑は平盧節度使の新設を天寶元年の如く言ふ。が新唐書卷六六方鎮表には開元七年平盧軍使を平盧

節度使に昇格した由を記す。

⑩ 御史中丞張利貞等はその代表とす。

⑪ 舊唐書康國傳に『生子必以石蜜内口中。明膠置掌内。欲其成長口常甘言掌持錢如膠之黏物』と傳ふ。

⑫ 新舊兩唐書通鑑。

⑬ 同。通鑑は特に三月とす。

⑭ 舊本紀。通鑑。但し新本紀に見えず。

⑮ 新安祿山傳に『養同羅降奚契丹曳落河八千人爲假子』と言ふ。通鑑、安祿山事迹卷上など同じ。

高麗出身高仙芝事蹟攷 (諏訪義護)

⑩ 新安祿山傳に『潛遣賈胡行詣道。歲輸財百萬……陰令群賈市錦絲朱紫服數萬爲叛資』とあり。

十一、高仙芝の防衛

玄宗は天寶十四載十月驪山の華清宮に幸し楊貴妃と共に温湯に浸つてゐた。移つて十一月突如として聞いたのは漁陽より地を震ふて来る鼓譟であつた。色を失つた玄宗は前述の如く安西より入朝してゐた封常清に討伐の方略を計つた。彼れは次の如く述べたと言ふ。

祿山領兇徒十萬徑犯中原。大平斯久人不知戰。然事有逆順勢有奇變。臣請走馬東京開府庫募饒勇。挑馬筆渡河計日取逆胡之首懸闕下（舊封常清傳）

玄宗は此の言を壯として翌日直ちに封常清を范陽平盧節度使に任じ東京に赴かしめた。常清は洛陽に至つて兵を募り旬日にして六萬を得、部署を定め防備を固め賊兵を待つた。此の時封常清と高仙芝とは如何かの聯絡があつたか否か記録上では見當らない。が高仙芝に早くより用ひられ來つた封常清であつたから推奏の事實があつたであらう。玄宗は華清宮より還るや京兆牧であつた榮王琬を『東討元帥』^①に任じ高仙芝を其の副と爲した。此の任命は新舊兩唐書その日附を異にしてゐるが新唐書の十一月丁丑の日と認めておきたい。^②

かくして東京と同じく京師に於ても内府の錢帛を出し募兵を行ひ約十一萬を得て『天武軍』と名付けた。その

募兵と飛騎墮騎及び邊兵等を合せて高仙芝は陝州に出陣した。玄宗は『勤政樓』に登つて是れを見送つたと言ふが感慨深きものがあつたらう。

安祿山は陳留を陥れ滎陽を屠り刻々と洛陽に近付いた。封常清は防戦に是れ勉めたが遂に支へ得ずして洛陽を後にした。通鑑には『封常清所募兵皆白徒。未更訓練……賊以鐵騎蹂之。官軍大敗』と言ふが新舊兩唐書の封常清傳を見れば驍騎や『柘羯』^④を率いて奮闘した様子を偲ぶ事が出来る。そして残り少き餘衆を以て陝州に退き來つた。陝州には高仙芝が兵を進めてゐた。彼れは高仙芝に賊軍の情況を具さに述べ寧ろ潼關に退いて守るに如かない事を勧めた。茲に高仙芝は其の地にあつた太原倉を開き錢絹を將士に頒ち潼關に移つた。中途に於て賊軍の追撃が劇しく甲を棄て算を亂して敗走した事は高仙芝の列傳にも見えて事實であつたらう。が潼關に達してからは新たに士氣を鼓舞し關門を固めて守つたから抜くを得なかつた。舊唐書高仙芝傳に『賊騎至關已有備矣。不能攻而去。仙芝之力也』と言ふも強ち過賞ではなかつた。

抑も潼關は河南陝西の省境に位し洛陽長安を繼ぐ孔道の上にあつた。北は黃河に臨み南は山岳を背ひ密雲幽谷を閉して實に天下の險に相應しかつた。是れを西に出づれば坦々たる大道が長安まで續いて、京師に對する最後の防衛據點であつたのである。東方より次第に壞れて來た官軍は是れを如何にしても死守しなければならなかつた。幸にも高仙芝が是れに踏み止まつて賊軍を近付けなかつた。が悲しむべき事件が起つた。それは高仙芝の軍中に監軍として従ひ來つてゐた邊令誠が玄宗に密奏して封常清及び高仙芝二人を斬らしめた事であつた。

- ① 新唐書玄宗紀に依る。舊高仙芝傳は『討賊元帥』と爲す。
- ② 舊唐書玄宗紀には十一月甲申の條に見え新唐書玄宗紀には丁丑の日に**出づ**。通鑑は後者と**同くす**。
- ③ 舊玄宗紀。
- ④ 新唐書西域傳安國 Bokhara の條に『募勇健者爲柘羯。柘羯者中國言戰士也』と見ゆ。Chavannes 氏は Marquart 氏の說に従ひ *tchakar* (*servus, famulus*) の音譯と爲す。西域記卷一颯秣建國 Samarkand の條に『其王豪勇隣國承命。兵馬強盛多諸窟羯。窟羯之人其性勇烈。視死如歸戰無前敵』とあり。窟羯は柘羯と同じなるべし。羽田教授は窟羯を Chalaka と見做して安祿山の軍中にある『曳落河』も是れに當ると考へらる。
- ⑤ 新唐書卷三八地理志陝州陝縣の下に『有太原倉』と出づ。所謂『北運』の西倉である。新唐書卷五三食貨志參見。

十二、高仙芝の終末

舊唐書玄宗紀の天寶十四載十二月の末節に

丙子斬封常清高仙芝于潼關。以哥舒翰爲太子先鋒兵馬元帥。領河隴兵募守潼關以拒之。

と出で、封常清と高仙芝が潼關に於て斬殺せられ哥舒翰が高仙芝に代つた事を傳へてゐる。兵馬元帥は兵馬副元帥の誤りである事は言ふまでもない。清の萬斯同が唐將相大臣年表に

(4、5)
〔兵馬副元帥〕哥舒翰。十二月命禦安祿山。

と稱するのは正しい。新唐書は此の事件を十二月癸卯としてゐる。司馬光も是れを支持してゐるから後者の説に従ふべきであらう。

前述した如く是れは監軍の邊令誠が密奏した結果であつた。邊令誠は既に述べ來つたやうに高仙芝が勅律を討征する頃より監軍として軍中にあつた。この度、安祿山討滅の命を奉じ副元帥として出發するに際しても、監軍として軍中に来る事となつた。が軍にあつて事毎に高仙芝に干渉を爲した。仙芝は多く是れに従はなかつた爲め入奏するに至つたと言ふ。是れは舊唐封常清傳に見ゆるところであるが、新唐書の高仙芝傳には更に『令誠數私於仙芝。仙芝不應。因言其逗撓狀』とあつて贈遣を求めたのに應じなかつた爲めである事を示してゐる。是れは何づれも動機を爲してゐたものと推察する。

その上奏した事情は『逗撓走敗』の狀況であつたが、尙ほ『常清以賊搖衆、而仙芝棄賊地數百里。陵盜稟賜』と附言した。茲に意を留むべきは敗戦逃走の罪のみでなく、高仙芝には天子の稟賜を盗私したと言ふ事が數へられてゐる點である。

玄宗は狼狽と焦慮の極にあつた時であるから直ちに怒つて是れを斬る事とした。邊令誠はその宣勅を以て潼關に至り、先づ封常清に示して處刑した。封常清は是れより先き敗戦の罪によつて官位を剝脱され、白衣を以て高仙芝の軍中にあつた^③。今や斬罪の制旨を受けても何等動ずる色もなく、懷中より一文の上表を取出し玄宗に奉らむ事を求めて、從容として死に就いた。舊唐書の封常清傳にはその全文が残つており至唐文に同じく見出す。そ

の中に『臣自城陷已來前後三度遣使奉表具述赤心』と言ひ、『臣死之後望陛下不輕此賊無忘臣言則冀社稷復安』等と稱するは如何に赤誠盡忠の臣下であつたかを想はしめる。死して『人多哀之』（新封常清傳）と傳へるは當時の實狀であつたらう。

封常清が既に屍となつて遷葬の上に置かれてゐた時、高仙芝は外事より歸り來つた。邊令誠は直ちに陌刀を持つてゐるもの百餘人を擁して恩命ありと一喝した。仙芝は謹んで勅言を承け靜かに死を賜らむとしたが言ひ残した言葉があつた。即ち『我退罪也死不辭。然以我爲滅殺兵糧及賜物等則誣我也』^⑤と稱したのであつて、飽くまで一身の潔白を表明して行つた。而もそれを部下に質し且つ彼等を慰め、更らに封常清の遺骸に語り盡して刑を仰いだ。異族の出身と雖も辱しからぬ最後であつた。

高仙芝は一見して貪欲の如きであつた。異族から出でた故にか兩唐書ともに列傳にその性『貪』と稱してゐる。その最も甚しいものとして石國を討征して『大瑟々十餘石眞金五六駝名馬寶玉稱是』（舊高仙芝傳）ほどの財物を奪取し家中に蓄へたと言ふ。が是れをよく人に散し、需むるものあれば應ぜざるなく、その幾何たるかを問はなかつた^⑥とさへ傳へる。又邊令誠と確執を生じた主なる原因と推測せらるゝ陝州の太原倉を開いた時も先づ將士に頒ち與へた。是等より想察すれば必ずしも貪欲なる者でなかつた。寧ろ彼れは自己の部衆を愛する爲めに金銀財寶を要したのであらう。彼れが死に臨んで冤罪を明かにする爲め部下に向つて『我募若輩本欲破賊取重賞云々』^⑦と言つたのは是れを卒直に述べたものに他ならぬ。又それを『高官重賞』（舊封常清傳）とも言つてゐる。異

族出身の將帥は正にかくの如くして戰功を建て地位を築いて行つたのであらう。

唯、彼れが非運の最後を遂げた事は異族なるが爲めのみでなく玄宗時代の監軍制度を深く考へしめらるゝのである。

① 通鑑考異に依れば『癸卯』は玄宗實錄の所傳で同時に哥舒翰が任命されたと傳ふ。舊本紀の丙午説は肅宗實錄に據つたものであつた。

② 舊封常清傳。

③ 新高仙芝傳。

④ 新封常清傳。

⑤ 新高仙芝傳。

⑥ 新高仙芝傳。

⑦ 新高仙芝傳。

⑧ 通典卷二七職官九の條によれば『神龍元年以後始以中使出監諸軍兵馬』と注せられてゐる。是れは宦官專横の端を爲すもので玄宗時代に甚しくなつた。

十二、異族の活動

天寶十四載十二月高仙芝が死を賜ふと同時に哥舒翰が代つて兵馬副元帥に任ぜられ安祿山防衛に出づる事とな^①

つた。當時、哥舒翰^②は風疾を得て京師に靜養を勉めてゐたが、既に威名があり且つ安祿山と不和の間柄にあつたので起用せられたのである。彼れは田良丘、火拔歸仁等の蕃漢兩將を引具して潼關に向つた。

翌十五載(755 A. D.) 正月安祿山は洛陽にあつて皇帝の位に即き國號を大燕と稱し聖武と建元した。^③ 同月その子安慶緒をして潼關を犯さしめたが哥舒翰の守り堅くして遂に退き去つた。潼關は入りて固むべき要害で、出て戦ふべき形勝でない。高仙芝と同様に哥舒翰も是れを深く信じて堅守と持久とを主とした。^④ が哥舒翰に含むところあつた楊國忠^⑤は玄宗に迫つて潼關より出で、戦ふやうにした。五月丙戌やむなく靈寶に進んで兵を交へた。然るに哥舒翰は不覺にも賊將崔乾祐の伏兵に遇ふて敗北し潼關に引返した。關に入るもの僅かに八千人と言ふ。此の時、部下の蕃將火拔歸仁に圍られて俘虜の身となり安祿山の陣營に送られた。舊唐書玄宗紀天寶十五載の條に

六月……辛卯哥舒翰至潼關。爲其張下火拔歸仁以左右數十騎執之降賊。關門不守。京師大駭。

と稱するのは此の消息を洩らすものである。茲に玄宗は京師を後にして蜀都に蒙塵し太子亨は別れて靈武に向つた。太子はその地にあつて即位し改元して至徳と言つた。^⑥ 即ち肅宗である。

肅宗は是れより回紇 *Uighur* に使者を遣し救援を求むる事とした。邠王守禮の子敦煌王承家が僕固懷恩と共に赴いた。回紇の懷仁可汗は兵四千を出し、その子葉護をして入國して應援せしめた。その頃すでに朔方安西の兵も集り大食南蠻の者も來り參じて士氣漸く振ひ、廣平王俶を天下兵馬大元帥と爲し郭子儀をその副として東下に決した。時に翌至徳二載閏八月であつたが、九月には早くも京師長安を回復し續いて十月東都の洛陽をも奪還した。

兩京定難の功は郭子儀王思禮等にあつたのである。

扱て天寶十四載十一月安祿山が反してより彼此多くの將兵が戰つた。がその出身を眺れば蕃漢實に多様であつた。桑原博士^⑩は既に此の點に注意せられたが極めて興味深きものである。先づ賊軍の主魁安祿山は康國出身者であつた。是れに續いた史思明も突厥種であつた。安忠志張孝忠が奚種で孫孝哲李懷仙が契丹である事は彼等の軍中として珍しく思はぬが高尙張獻誠等の漢人も是れに加つてゐる。^⑪

卒爾として考ふれば唐室擁護の官軍は殆んど漢人ばかりの如く想像せらるゝであらう。が最初太子の先鋒として副元帥に補せられた高仙芝は上述の如く高麗出身で是れに代つた哥舒翰また異族の突騎施 (Türgesh) 哥舒部の人であつた。その部下に多くの蕃將がゐて、舊唐書哥舒翰傳には出陣の諸將を次の如く傳へてゐる。

以田良丘爲御史中丞充行軍司馬。以王思禮鉗耳大福李承光蘇法鼎崇嗣及蕃將火拔歸仁李武定渾瑒契苾寧等爲裨將。

火拔歸仁が突厥人 Türges で渾瑒及び契苾寧が鐵勒 Türgis の渾部又は契苾部の者であつた事は疑ひない。が漢將と見做されてゐる王思禮は高麗出身の異族で、鉗耳大福も吐蕃人であつた。^⑫

前述した封常清と郭子儀は寧ろ稀れに見る漢族出身の武將で、已に李光弼は契丹種であつた。その他、畢思琛は畢國 (Biland)^⑬ 達奚珣は鮮卑、僕固懷恩、渾釋之渾瑊等は鐵勒、李抱玉は安國、尉遲勝は于闐、白光德は龜茲、論惟貞、荔非元禮は吐蕃等の人々であつた。かく觀じ來れば漢族出身の武將は極めて寥々たるもので名を留むる

ものは異族出身が壓倒的多數を占めてゐる事を確め得よう。

轉じて實際上に戰つた軍隊の種別を尋ねてみよう。安祿山は初め自己の所部及び同羅、奚、契丹、室韋等十五萬を率いて南下した。同羅 Tongra¹⁵ は鐵勒の一部であるが此の外に突厥軍も可成りに這入つてゐた。それは東都を占領して後、河北の動搖で安祿山から同羅突厥が背き去つたと傳へてゐる事實¹⁶を見て理解出来る。併し賊軍の中にも屢々『蕃漢何萬』と稱ぜらるゝから漢人も相當に多かつたやうである。李光弼が張獻誠の軍を目して『團練之人』と稱したのも注意すべきであらう。

唐室の爲めに戰つた異族の軍隊は實に多い。邊垂地方に移住して來てゐたものもあらうが又異國から特別に來援した軍隊も少くない。最も著しい例を舉ぐれば安祿山事迹卷中に見ゆる哥舒翰の統下の兵種であらう。『奴刺、頡跌、朱耶、契苾、渾、(黠)林、奚結、沙陀、蓬子、處密、吐谷渾、思結』等の諸部の兵がゐた。その後、阿史那從禮の突厥軍が降り來り、回紇、拔汗那の兵が招れた。そして郭子儀に依つて京師回復の時に率ゐられたものの中には大食、南蠻の兵も含まれてゐた。是等の中間に位する安西諸國の兵は言ふに及ばないであらう。

是れを要するに安史の亂に於ては敵味方ともに蕃漢入り亂れて戦ひ而も異族の意外に多數なるに一驚する。恰も異族が支那の中原を借りて相争ふが如き感を懐かしめる。されば安史の大亂は異族を見逃しては考へ得られないであらう。然らば全く異族の戦亂であるか。否な何づれも唐室を中心として相戦ひ唐室の名に於て相争ふた。茲に安史の内亂の特殊な性格を發見すべきである。

- ① 前掲新舊兩唐書玄宗本紀に見ゆ。
 - ② 列傳(舊唐書卷一〇四新唐書卷一二五)。
 - ③ 新唐書本紀は記す事を避けてゐる。
 - ④ 新舊兩傳及び通鑑に看取される。
 - ⑤ 哥舒翰が安思順を殺してより害の身に及ばむ事を常に恐る。
 - ⑥ 舊傳及び通鑑の説。新傳は數百騎とす。
 - ⑦ 舊傳には『械送洛陽』とあり。通鑑唐紀三二に精し。特に『公不見高仙芝封常清乎』の言、注意せしめらるゝ。
 - ⑧ 天寶十五載七月甲子。八月蜀都に以聞。
 - ⑨ 新本紀の説。舊本紀は九月とす。
 - ⑩ 東洋文明史論叢 p. 293-300
 - ⑪ 賊軍の主將を表にして左に掲ぐ。
- | | | | |
|-----|----|----------|--------|
| 安祿山 | 康國 | 舊傳二〇〇上 | 新傳二二五上 |
| 史思明 | 突厥 | 舊傳二〇〇上 | 新傳二二五上 |
| 安忠志 | 奚種 | (通鑑唐紀三三) | |
| 張孝忠 | 奚種 | 舊傳一四一 | 新傳一四八 |
| 孫孝哲 | 契丹 | 舊傳三〇〇上 | 新傳二二五上 |
| 李懷仙 | 契丹 | 舊傳一四三 | 新傳一三七 |
| 高尙 | 漢人 | 舊傳二〇〇上 | 新傳二二五上 |

高麗出身高仙芝事蹟攷 (諏訪義賢)

高麗出身高仙芝事蹟攷（諏訪義讓）

二二八

張猷誠 漢人 舊傳一二二 新傳一三三

安慶緒 史朝義は父に準ずるものとす。

⑫ 通志卷二九氏族略五關西復姓。

⑬ Tomashok; Central asiatisches Studien, I, s. 105

⑭ 官軍の主將を表にして左に掲ぐ。

高仙芝 高麗 舊傳一〇四 新傳一三五

哥舒翰 突厥 舊傳一〇四 新傳一三五

王思禮 高麗 舊傳一一〇 新傳一四七

火拔歸仁 突厥（通鑑唐紀三二、三三）

渾 萼 鐵勒（新舊哥舒翰傳）

契苾寧 鐵勒（新舊哥舒翰傳）

封常清 漢人 舊傳一〇四 新傳一三五

郭子儀 漢人 舊傳一二〇 新傳一三七

李光弼 契丹 舊傳一一〇 新傳一三六

畢思琛 畢國（通鑑唐紀三三）

達奚珣 鮮卑（通鑑唐紀三三）

僕固懷恩 鐵勒 舊傳一二一 新傳二三四上

渾釋之 鐵勒 舊傳一三四 新傳一五五

渾 域 鐵勒 舊傳一三四 新傳一五五

李抱玉 安國 舊傳一三二 新傳一三八

尉遲勝 于闐 舊傳一四四 新傳一〇

白光德 龜茲 舊傳一〇九 新傳一三六

論惟貞 吐蕃 新傳一一〇

荔非元禮 吐蕃 通志氏族略五新傳一三六

右の中、火拔歸仁、畢思琛、達奚珣は賊軍に降つた。その他、漢人として名の殘るものを附記しよう。

顏真卿 漢人 舊傳一二八 新傳一五三

顏杲卿 漢人 舊傳一八七下 新傳一九二

張 巡 漢人 舊傳一八七下 新傳一九二

許 遠 漢人 舊傳一八七下 新傳一九二

李嗣業 漢人 舊傳一〇九 新傳一三八

⑮ Thomson: *Insc. de l'Oriental*, p. 11, N. 57.

⑬ 通鑑唐紀三四。

⑭ 通鑑唐紀三三。

十四、唐代の半島人

高麗出身高仙芝事蹟攷 (諏訪義護)

唐代に於ては高仙芝の外に如何なる半島出身者があつたか。特に是れを瞥見してみよう。それに就いて先づ腦裏に浮び來るは

泉男生^① である。彼れは新唐書に列傳があり舊唐書にも事蹟を傳へてゐるが、有名な高麗の泉蓋蘇文の子であつた。蓋蘇文は榮留王(高建武)を弑して寶藏王(高藏)を立てた革命家で、唐の太宗からも屢々大兵を差向けられたが巧みに是れを遁れ乾封元年(668 A. D.)に卒した。その子に男生男建男産の三人があつて男生は他の二弟と和せず平壤を後にして唐に歸投した。李勣が高麗を討つたのは是れに發するものである。總章元年(668 A. D.)九月寶藏王は出で、降り高麗は遂に滅んだ。男生はその後、儀鳳二年(677 A. D.)遼東に出で、高麗の遺民を安撫して寛大なる仁政を以て大いに喜ばれ四十二歳を一期として世を去つた。舊唐書高麗傳には儀鳳の初めに卒すと云ふから間もなくの事であつたらう。死して并州大都督を贈られた。その子

泉獻誠^② は父が唐に降らむとした時、先使として遣はされ、唐に入つてからは騎射を善くする以て軍中に用ひられ、天授年間に右衛大將軍を授けられた。相續いて武功を建てたが、酷吏來俊臣の爲めに謀反を計るものとして告奏せられ、自ら縊れて死んだ。則天はその冤罪なりしを知つて『以禮改葬』とさへ傳へらるゝ。

少し遅れて卑賤より身を起した者として

王毛仲^③ がある。同じく高麗の出身で、父は游擊將軍となつてゐるが故あつて浚官に附せられ王毛仲も少にして官奴となつた。玄宗が臨淄王であつた時代より李守徳と共に近側に仕へた。騎射に長じ次第に重ぜられた先天

二年(713)には補國大將軍に任ぜられた。更らに左武衛大將軍に進み内外開厩總監となり遂には霍國(山西霍縣)公實封五百戸に封ぜられた。が満足せずして玄宗に兵部尙書を求め、與へられずして反亂を企て開元十五年(727 A. D.)振州に流された。玄宗は途上に使者を出して是れを縊れしめた。その地を永州(湖南靈陵)と傳へる。

王思禮^⑥ は高仙芝と並び稱せらるべき者であろう。本、營州(熱河朝陽)にゐたと言ふから何づれば高麗の遺民である。又列傳には高麗の出自と明かに記す。彼れの父も武技を以て朔方の軍將となつてゐた。従つて幼少より戎旅に慣れ節度使王思嗣に就いて河西に至り哥舒翰と共にその押衛となつた。安史の亂發するや哥舒翰の主將として大いに奮戦し潼關破れたる後も靈武の行在に徙り、兵部尙書關内節度使等に叙せられ、郭子儀と協力して京師を克復した。爲めに霍國公に封ぜられ實封五百戸を賜つた。上元元年(760 A. D.)には司空となり翌二年、天壽を全ふして卒した。舊唐書列傳には『思禮長於支計、短於用兵』と稱し新傳には『器甲完精儲粟百萬』と傳へる。武將でありつゝも理財に長じ武器兵糧を多く蓄へてゐたのであらう。異族出身者にして勢力のあり得た所以ではあるまいか。

高麗系統の人物でないが唐初武名赫々たる人に百濟の出身者

婁齒常之^⑦ がある。丈、七尺に餘り驍毅であつたと傳ふ。蘇定方が顯慶五年(660 A. D.)百濟を平け義慈王を降し高麗人を擒へて去つた時に常之も所部を從へて唐に降つた。が一度び叛いて百濟に歸り、龍朔三年(663 A. D.)高宗の招撫に應じて再び唐に歸順した。それより吐蕃 Tibet 突厥 Turk 等と常に戦ひ、功績によつて燕國

公に封ぜられた。が常之も酷吏の周興⑧なる者より趙懷節の一味となつて謀反を爲すものとせられ、自ら潔しとせずして死んだ。新唐書には特に『諸蕃將帥』列傳がある。中にも随一と目すべきであらう。

是等⑥の中、泉氏父子は出自が既に高く唐朝に仕へても重ぜられた事は寧ろ當然であつた。が高仙芝王毛仲王思禮等は一介の武弁を以て身を立て異國の朝廷にあり乍ら位を極め官を重ねて其の名を知られた。殊に高仙芝王毛仲王思禮並びに泉獻誠も等しく騎射を善くして出世を爲したるは興味ある事である。東夷は古より弓矢を以て名を得たのであらう。それと同時に高仙芝が巨萬の富を家に藏し王思禮が支計に長じ泉獻誠が他より財貨を求められ黒齒常之が財寶をよく散ず等と傳へられて理財に關係深きは意を留めしめる。武を以て身を立て財を以て身を全ふするより途がなかつたとも推察される。それにしても高仙芝王毛仲黒齒常之更らに泉獻誠等が符節を合はしたる如く非運の最後を遂けてゐるのは異族の終末として有り勝ちの事とは言へ哀愁の感なきを得ない。就中、高仙芝は廣く亞細亞に跨つて驅使せられつゝも最後を恵まれなかつたものと稱すべきであらう。

が茲に疑問を起さしむるは新羅人が見えざる事である。新羅は百濟高麗の亡びたる後、漸次その故地を收めて行つた。と同時に唐室にも恭順の意を表してゐた。即ち獨立を保ちつゝ親善關係を有してゐたのであつた。それ故、國內に勢力を伸展し得ると共に唐朝に出で、も漢人と互に伍し得た。慧超⑩が印度から歸り來つて唐朝の譯場や内道場に入出し、立太立恪等⑪が漢人求法僧と相並んで旅立つて行く姿を眺める事が出来たであらう。故國を失ひたる者の進出し得る唯一の途は實力を現實に示し得る方面なる事を今更らの如く想起せざるを得ない。

- ① 舊唐書卷一九九上高麗傳、新唐書一一〇列傳。
- ② 舊高麗傳。
- ③ 新舊兩唐書とも泉男生に續いて見ゆ。
- ④ 舊唐書卷一八六上、新唐書卷二〇九の酷吏列傳の中にあり。京兆の人。
- ⑤ 舊唐書卷一〇六、新唐書卷二二一。
- ⑥ 前掲。
- ⑦ 舊唐書卷一〇九新唐書卷一一〇。
- ⑧ 舊唐書卷一八九上新傳書卷二〇九の酷吏列傳に見ゆ。京兆の人。
- ⑨ 以上六人の他に唐代の正史の中には高麗の人として
李正己なるものがある。本名を懷玉と言ひ平盧即ち營州に生れた。安史の亂の末頃、唐室に内應して平盧節度使の侯希逸を援け青州に進んで北邊一帶を手に入れた。寶應二年(763)史朝義を征して後、侯希逸を逐ひ出し自ら平盧淄青節度使となつた。この時、唐室より名を正己と賜ひ次いで尙書右僕射に補せられ、饒陽郡(河北饒陽)王にまで封ぜられた。が固より至誠を以て唐室に服順したのでなくその子納、その孫師古と相繼いで藩鎮の跋扈を恣にする事となつた。是れは全く存在の意義を異にして名を留めたのである。便宜上補注の條に述べる事とした(舊唐書卷一二四新唐書卷二二二)。
- ⑩ 宗教界一一の七高楠博士『慧超往五天竺國傳について』。
- ⑪ 義淨、西域求法高僧傳卷上。この外に阿離耶跋摩法師、慧業、慧輪等の名出づ。

結語

是れまで考察し來つた處によつて、高仙芝の事蹟を明かに爲し得たと思ふ。その主なるものを要約すれば左の如くであらう。

開元末

安西副都護、都知兵馬使となる。

天寶六載七月

小勃律を平定して王を擒ふ（歸仁軍置かる）。

天寶六載十二月

安西節度使となる。

天寶九載

羯師を征服し國王を擒ふ。

天寶九載

石國を討伐して國王を擒ふ。

天寶十載七月

大食と怛邏斯に戦ひ敗らる。

天寶十載

安西節度使を解かれ歸る。

（天寶十二載

封常清、大勃律を征し綏德府を置く）。

天寶十四載

密雲郡公に封ぜらる。

天寶十四載十一月

征東副元帥となり安祿山を禦ぐ。

天寶十四載十二月 潼關にて死を賜ふ。

彼れは高麗の遺民より身を起し西域にあつて武功を建て着々として地位を獲て行つた。そして邊境塞外の防備が専ら異族出身の將帥に委ねらるゝや彼れは意企するまゝの奔放なる經綸を行つた。勃律を屠り羯師を平け石國を服した。又小なるものとしては蘇毗、播仙を伐つた。正に彼れの時代が唐の西域經營の最盛期であつた。

が怛邏斯の一戰は彼れを一敗地に塗れしめ西域瓦解の端緒となつた。彼れは直ちに唐の中央に歸らざるを得なかつた。が間もなく安史の大亂が勃發した。

安史の大亂は前述した如く唐室中央の武備と邊境將帥の兵力との均衡とを失つたところに自然に發生すべき運命を持つてゐた。が大體より言へば安祿山は東北の勢力を根柢として起ち上り唐室は是れに對して西北の勢力に依頼した。高仙芝が東討副元帥に擧げられたのは決して故なき事でない。彼れは一朝の蹉跌の爲めに一命を失つた。が終生、西域と運命を共にしたと言ひ得よう。安史の亂後、西域は全く唐より離れ去つた。

自分は先きに安史の大亂に際し高仙芝のみでなく多くの異族が將帥となり軍兵また殆んど異族であつた事を述べた。是れは唐室が最初より異族に對して寛大な處置をとり實力若しくは才能あるものを躊躇なく採用した政策の結果でもある。が太宗以來、屬領に州縣の制度を施して名義上ばかりでなく實際上の統治を行つた爲め彼此統合された世界帝國が形成された事を見逃してはならぬ。安史の亂は屬領の諸異族が公然と唐に入り來つた最後の機會であつた。

それ故、安史の亂に異族の多い事は偶々其處に現れたのに過ぎなくて當時の社會には意外に多くの異族が存在してゐたのである。④ 唐代の社會及び文化と稱してもかゝる異族及び異族風を取除いては考へ得られない。寧ろ安史の亂の性格の如く、異族及び異族風が唐室を中心として融合され統制されたものに他ならなかつたであらう。

① 單に高仙芝の事蹟のみでなく當時の西域關係及び國內事情にも觸れ得て恰も開元天寶の盛唐期を概観する事が出來たかとも思ふ。是れ又主題を選んだ理由でもあつた。

② 唐室が夷狄より出でたと言ふ説もあつた。劉盼遂『女師大季刊』一の四、二の一。『燕京學報』一五。陳寅恪『中央研究院集刊』三の一、四。金井之忠『文化』二の六等參見。

③ 羽田教授『西域文明史概論』p. 130 以下參照。

④ 馮承鈞『唐代華化蕃胡考』（東方雜誌二七の一七）。桑原博士『隋唐時代に支那に來往した西域人に就いて』（東洋文明史論叢 p. 277—）。向達『唐代長安與西域文明』。

（一九四一、一〇稿）